令和 元年度

愛知県埋蔵文化財センター
年報

2020

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

目　　次

Ⅰ.令和元年度事業概要 ……1
調査の理由と工程 …… 2
令和元年度調査遺跡位置図 …… 4

Ⅱ.遺跡調査の概要 …… 7
稲沢市　一色城跡（本発掘調査B）…… 8
一色青海遺跡（本発掘調査B）…… 12
大口町　白木遺跡（本発掘調査B）…… 16
清須市　清洲城下町遺跡（本発掘調査B）…… 17
朝日遺跡（本発掘調査B）…… 18
安城市　亀塚遺跡（本発掘調査A・B）/向田遺跡（本発掘調査B）…… 20
設楽町　万瀬遺跡（本発掘調査B）…… 22
石原遺跡（本発掘調査B）…… 30
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡（本発掘調査B）…… 36
大空前遺跡（本発掘調査A）…… 38
豊川市　花ノ木古墳群（本発掘調査A）…… 39

Ⅲ.刊行報告書抄録 …… 41
第209集　北丹波・東流遺跡 …… 42
第213集　川向東貝津遺跡 …… 44
第214集　北山窯跡・勘介窯跡 …… 46
第216集　普門寺旧境内 …… 48

Ⅳ.普及・公開活動の記録 …… 51
埋蔵文化財展 …… 52
第８回 考古学セミナー「あいちの考古学2019」…… 56
考古学体験とバックヤードツアー …… 60
連続歴史講座・埋文市民大学　「石の考古学」…… 62
歴史講座「発掘された西三河の城２」…… 64

Ⅴ.埋蔵文化財センターの活動 …… 67
資料の貸出・提供 …… 68
ホームページ …… 69
地元説明会・遺跡報告会 …… 71
報告書作成のための指導 …… 71
発掘調査における遺構・遺物などの指導 …… 71
その他普及事業 …… 72
令和元年度愛知県埋蔵文化財センター組織一覧 …… 74

表紙図版　万瀬遺跡（設楽町）19Bb区出土遺物

Ⅰ. 令和元年度事業概要

調査の理由と工程

1. 発掘調査

事業主体		事業名	遺跡名	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当
県建設局 下水道課	一宮 建設事務所	日光川上流流域 下水道事業	一色青海遺跡	1,800	令和元年5月 ～10月	樋上・鈴木恵
県建設局 下水道課	尾張流域 下水出張所	新川西部流域 下水道事業	朝日遺跡	21	令和元年12月	樋上
県建設局 道路建設課	一宮 建設事務所	給父稲沢線 道路改良工事	一色城跡	2,500	令和元年7月 ～12月	樋上・永井邦
県建設局 道路建設課	一宮 建設事務所	一般国道155号 道路改良工事	白木遺跡	370	令和2年2月 ～3月	樋上・早野
県建設局 道路建設課	尾張 建設事務所	橋梁整備工事	清洲城下町遺跡	205	令和2年2月 ～3月	樋上
県建設局 道路建設課	知立 建設事務所	中小河川改良事業 （鹿乗川）	亀塚遺跡	70	令和2年1月 ～3月	樋上・鈴木恵
県建設局 河川課	知立 建設事務所	中小河川改良事業 （鹿乗川）	向田遺跡	370	令和2年1月 ～3月	樋上・鈴木恵
県建設局 道路建設課	東三河 建設事務所	一般国道151号 （一宮BP）	花ノ木古墳群	60	令和元年5月 ～6月	樋上・早野
国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	上ヲロウ ・下ヲロウ遺跡	3,600	令和元年5月 ～9月	酒井・永井宏 宮腰
			石原遺跡	6,800	令和元年5月 ～11月	酒井・武部 田中
			万瀬遺跡	8,200	令和元年6月 ～令和2年1月	酒井・川添 河嶋
			大空前遺跡	80	令和元年5月	酒井・永井宏 宮腰

2. 整理・報告書編集

	事業主体		事業名	遺跡名	調査面積(㎡)	調査年度
整理	国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	川向東貝津遺跡	3,950	H.22・27・28
	国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	笹平遺跡	6,950	H.27
	国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	設楽ダム関連遺跡	18,600	R.1
	県建設局 河川課	尾張 建設事務所	総合治水対策 特定河川事業	清洲城下町遺跡	4,400	H.12・13 ・29・30
整理・報告	県農林水産部 森林保全課	東三河 農林水産事業所	予防治山事業 小規模治山事業	普門寺旧境内	300	H.29

3. 令和元年度刊行物

・埋蔵文化財調査報告書(計4冊)

第209集　北丹波・東流遺跡

第213集　川向東貝津遺跡

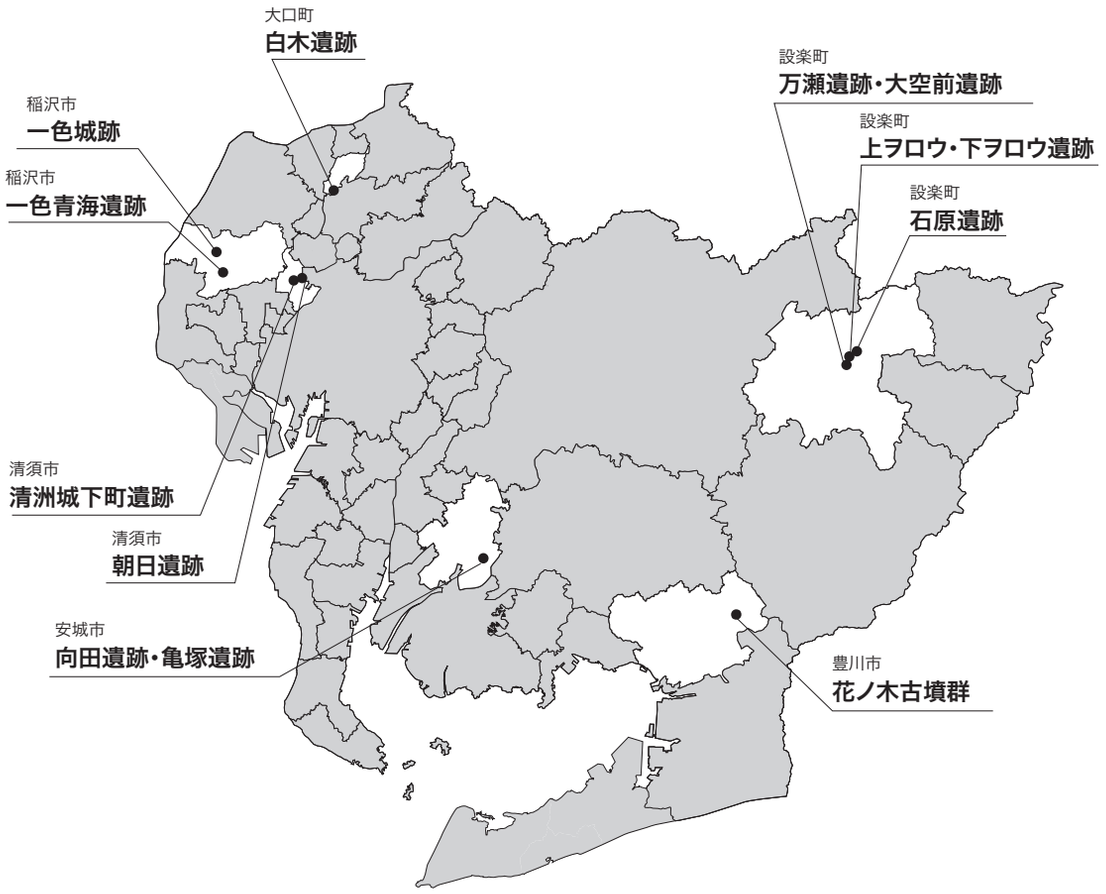
第214集　北山窯跡 勘介窯跡

第216集　普門寺旧境内

・令和元年度　愛知県埋蔵文化財センター年報

・研究紀要　第 20 号

令和元年度　調査遺跡位置図



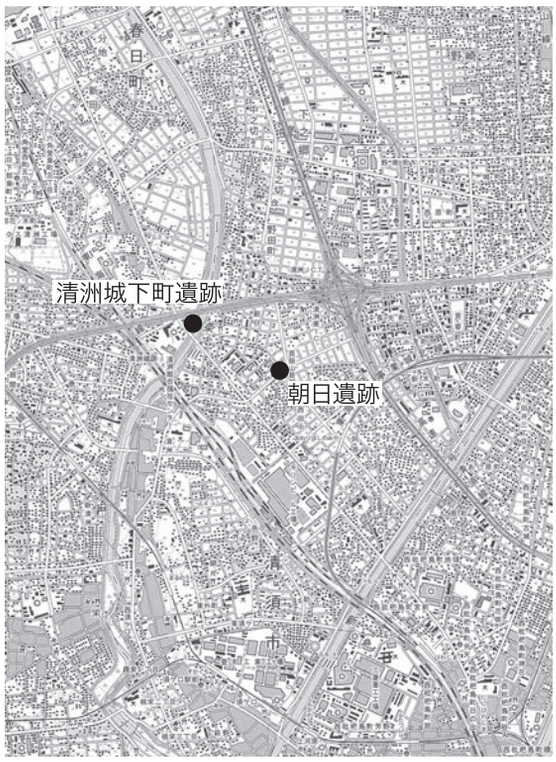


国土地理院 1/2.5 万地形図「田口」



国土地理院 1/2.5 万地形図「小牧」

※地形図は 50%縮小しています。



国土地理院 1/2.5 万地形図「清洲」



国土地理院 1/2.5 万地形図
「竹鼻・一宮・津島・清洲」



国土地理院 1/2.5 万地形図「安城・西尾」



国土地理院 1/2.5 万地形図「新城」

※地形図は 50%縮小しています。

II. 遺跡調査の概要

一色城跡（本発掘調査B）

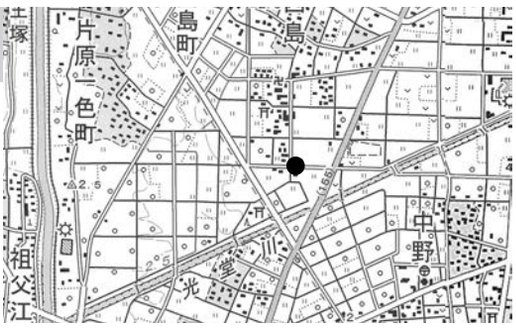
所在地　稲沢市西島本町
（北緯35度15分00秒　東経136度44分58秒）

調査理由　県道給父稲沢線道路改良工事

調査期間　令和元年7月～12月

調査面積　2,500㎡

担当者　樋上 昇・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「竹鼻・一宮・津島・清洲」）

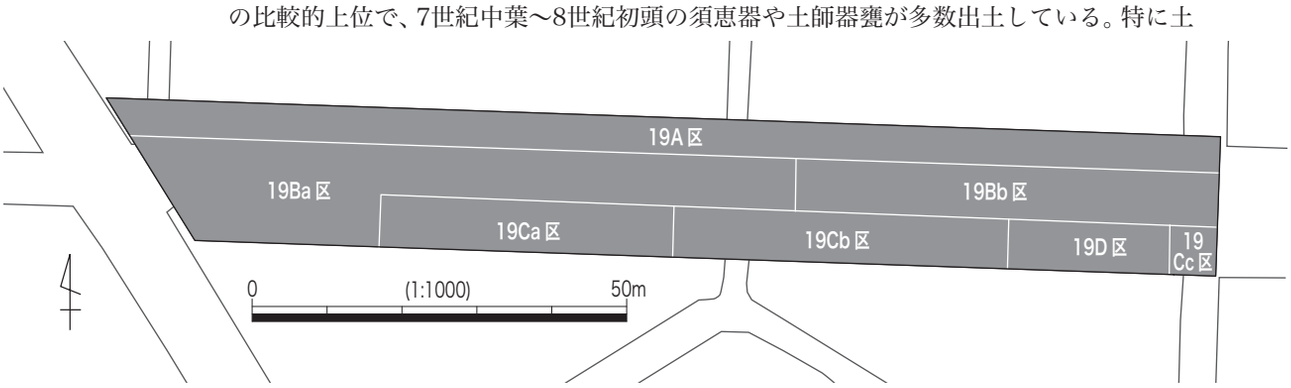
調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。今年度の調査対象地は、東西約139mの現道および両側拡幅部分（幅計約18m）である。事業地内に現用水路や水田があり、また工事と併行する時期が生じたため、調査区は19A・19Ba・19Bb・19Ca・19Cb・19Cc・19Dの7区に分けられた。

立地と環境　遺跡は、尾張平野北西部の沖積低地に所在し、東に三宅川、西に日光川が流れる自然堤防地帯に立地する。今年度の調査区は、おおむね南北方向にのびる自然堤防を横切るかたちで設定されている。遺跡は、全体的に耕作などで上部が削平されている。そのため、遺構検出面はおおむね水平であるが、調査区東端で後背湿地とみられる凹地が検出されたことから、調査区東半部は、東および南方向への緩傾斜地形に相当すると考えられる。

調査の概要　検出された遺構は、古墳時代前期、飛鳥時代～奈良時代、室町時代～江戸時代である。とりわけ最大の遺構は、調査区西端で検出された一色城（戦国時代）の堀跡である。一方で遺物は、弥生時代後期の土器が若干あるが、飛鳥時代～奈良時代の土器が最も目立つ。遺構面は大きく2面あり、古墳時代前期～奈良時代の遺構が、砂質シルトの基盤層上面で黒褐色シルトの遺物包含層を伴って検出され、室町時代～江戸時代の遺構が、それらを覆う灰黄褐色シルト層の上面で検出されている。後者の灰黄褐色シルト層は、稲沢市域で広くみられるもので、調査区内では最大厚は約0.3mである。層中からは山茶碗が出土する。

古墳時代前期　19A区と19Ba区では、基盤層上面で古墳時代前期の溝と掘立柱建物跡が検出されている。溝530SDは概ね東西方向に約8.6m延びてその両端で南方向に湾曲しているが、その先は削平されていて不明である。溝とその周辺で出土した土器は、S字状口縁台付甕と高杯が主体で、時期は廻間式～松河戸Ⅰ式である。

飛鳥・奈良時代　19A区には、溝530SDの北側に併行して東西方向へ約24.5m延び、両端が調査区外の北側へ曲がる飛鳥～奈良時代の溝128SDがある。溝幅は約1mを測り、黒色粘質シルト層の比較的上位で、7世紀中葉～8世紀初頭の須恵器や土師器甕が多数出土している。特に土



一色城跡の調査区配置

師器甕は長胴の伊勢型で、横倒しの出土状況であることから、7世紀末までに溝の機能が停止していたと想定される。

一方溝128SDから東側では、主に8世紀の建物遺構が分布している。内訳は竪穴建物跡が18基、掘立柱建物跡が4基である。竪穴建物跡は、全形が判明したものはないが、平面規模は一辺が3.0～4.7mとみられる。これらは削平が著しく、大半が床面付近しか残存していないが、一部では壁溝や柱穴が検出されている。一方で、カマドやその可能性がある焼土遺構はほとんどみられない。遺構内からの出土遺物は小片が多いものの、特徴的なものとして、底部内面に「美濃」刻印のある須恵器杯1点や鉄鉢形須恵器が出土している。掘立柱建物跡の中には、布掘状の掘り方（19Bb区282SD）となるものが1基ある。当該遺構は出土遺物が寡少であるものの、竪穴建物跡を切り込んでいることが判明している。建物跡の方位は、正方位と斜方位が混在している。竪穴建物跡には古墳時代のものが含まれている可能性もあり、時期別にみた建物方位の変遷については今後の検討課題である。

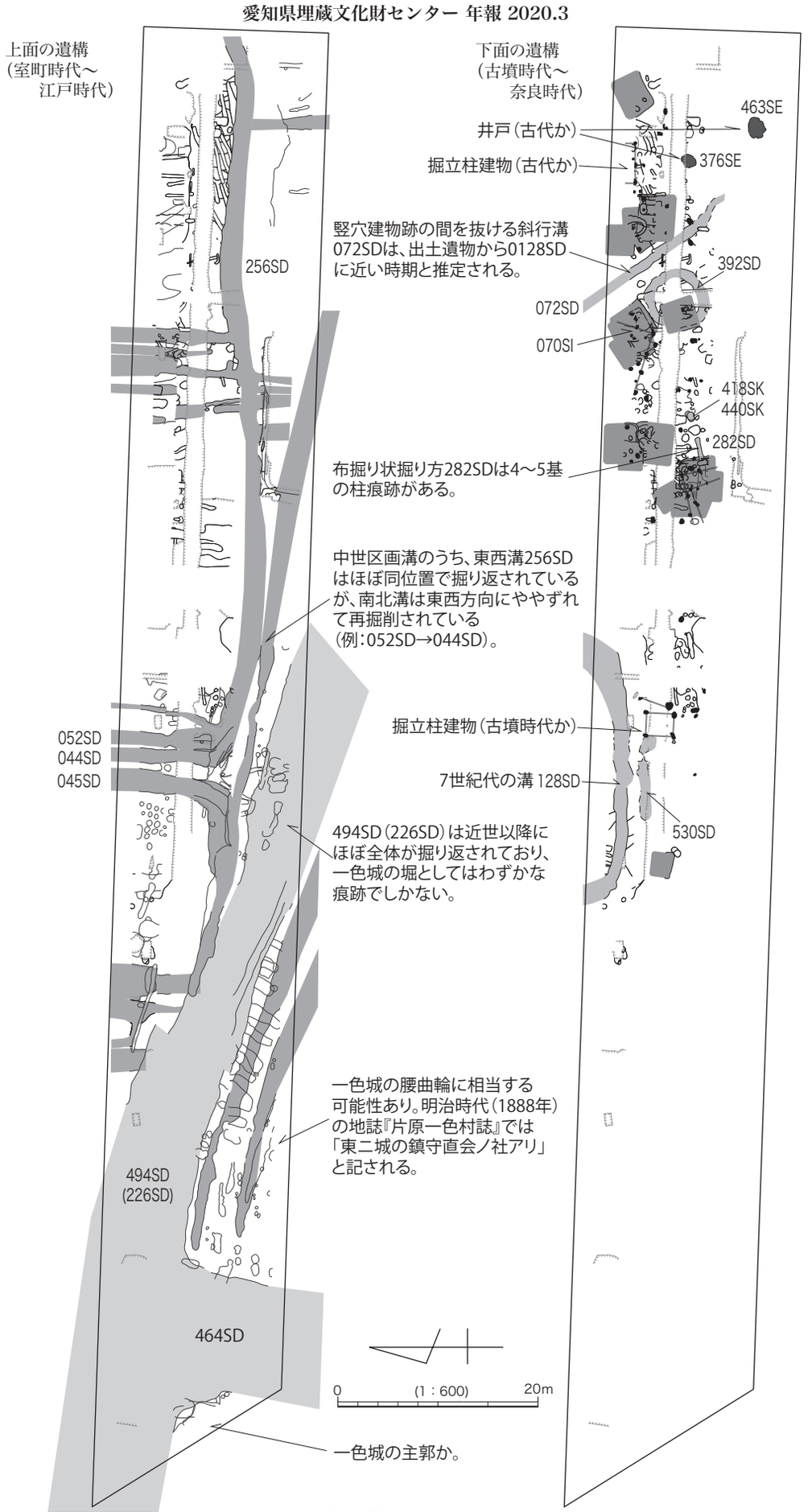
7～8世紀代に推定される特殊な遺構として、井戸2基と周溝状遺構がある。井戸は調査区南東部にある。井戸側などの構造物は未検出である。19 Bb区376SEでは焼土や炭化物の集積層がみられ、桃核が出土している。19D区463SEでは板状木製品が出土している。一方、周溝状遺構19Bb区329SD(19A区158SD)はやや不整な円形を呈し、外周の直径は約6.2mを測る。溝の断面は立ち上がり角度の急な逆台形で、深さ約0.3mを測る。堆積層の比較的下部で、7世紀末～8世紀初頭の須恵器杯が出土している他、遺構そのものを竪穴建物跡が切り込んでいることから、集落に先行する時期に構築されたと考えられる。遺構の性格を特定できる遺物はなく、中心部分に撹乱を受けているが、規模・形状から終末期の円墳の可能性がある。また当該遺構の西約9mの地点には、土坑墓と思われる長軸約1.1mを測る隅丸長方形の土坑440SKがある。埋土からは棒状鉄製品が出土している。

中世区画溝

8世紀の土器が出土する建物群が廃絶した後は、遺構・遺物の希薄な期間が続く。次にみられる遺物は、山茶碗の尾張第8～9型式である。遺構は区画状の溝群で、屋敷地を区画していたと推定される。最も溝群が集中するのは19Ba区で、並行する2条の南北溝がそれぞれ東と西へ屈曲して引き続き東西溝となる地点がある。2条の南北溝からは、溝群の中で最も中世陶器類が集中して出土している。溝間は道路だった可能性もあり、当該期に集落内の主要な場所になっていたと考えられる。一方、区画内の状況は不明な点が多く、若干の柱穴が、灰黄褐色シルト層の上から掘り込まれている程度である。

一色城の堀

19Ba区西端で検出された一色城跡の堀464SDは、南北方向に約12m分を検出した(19A区では撹乱により滅失)。規模は、幅約13.0m深さ約1.1mを測る。立ち上がりは緩く、断面形は逆台形よりも皿状に近い。堀底は旧河道の細粒砂層に到達しており、同層中には流されてきた樹木が多数出土している。これに対して堀の堆積は灰色粘土層で、断面観察では複数回の掘り返しが認められる。出土遺物は極めて少なく、底近くで16世紀代と考えられる漆椀が出土している。調査区北端には堀と東西方向の堀との交差点がある。東方向へは途中でやや南へ方位が振れている（19Ba区494SD、19Ca区246SD）。当該遺構の南側には、全体的に削平を受けたとみられる区画があるが、明治時代の地誌などから城の腰曲輪に相当するものと考えられる。また494SDでは、近世以降にほぼ全体を掘り返していることが確認され、溝として近代まで機能していたとみられる。これによって、北の西島村と南の片原一色村に分かれており、一色城跡は片原一色村に属している。



一色城跡主要遺構分布（S=1/ 600）

ま と め　一色城は、織田家の家臣である橋本氏が８代にわたって城主であったと伝えられ、特に橋本一巴は、織田信長に鉄砲を指南したことが『信長公記』に記されている。しかし17世紀初頭に廃城になった後は、『寛文村々覚書』などの地誌に片原一色村の「古城跡」として記されているのみで、その所在も不明となっていた。近年には地籍図からの推測もなされていたが、発掘調査で遺構が検出された意義は大きい。尾張平野には多数の中世・戦国城館が存在したことが知られているが、城主が判明しかつ具体的な規模が明らかにできた事例として特筆される。（永井邦仁）



遺跡全景（南東から）



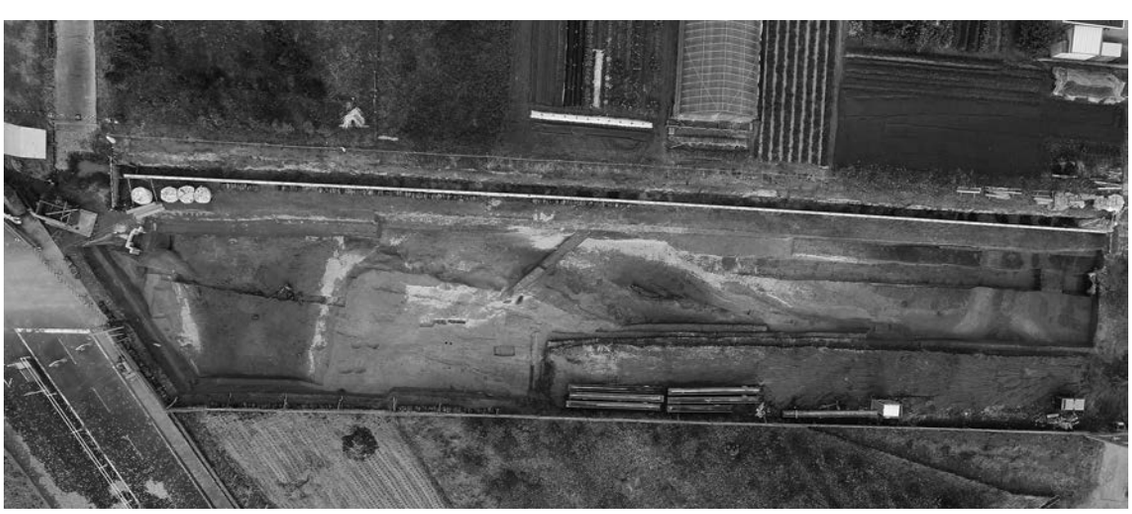
土師器長胴甕の出土状況（128SD）



周溝状遺構 392SD（西から）



竪穴建物跡 070SI（北西から）



一色城の堀 464SDおよび494SD（上空から）

一色青海遺跡（本発掘調査B）

いっしきあおかい

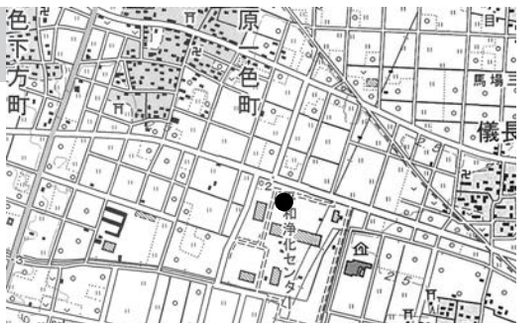
所在地 稲沢市一色青海町地内
（北緯35度14分10秒　東経136度45分20秒）

調査理由 日光川上流流域下水道事業

調査期間 令和元年5月～令和元年10月

調査面積 1,800㎡

担当者 樋上 昇・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「津島・清洲」）

調査の経過

調査は愛知県建設局下水道課一宮建設事務所による日光川上流流域下水道事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて令和元年5月から令和元年10月にかけて実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地であり、近代の耕作土および床土を除去した１面目として平安時代～江戸時代までの遺構を扱い、１面目の遺構除去後に検出される弥生時代中期後半の遺構を２面目として扱っている。調査面積は1,800㎡である。

立地と環境

一色青海遺跡は三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道自然堤防上に位置している。遺跡周辺の現況は、点在する集落以外は水田や耕作地として整備され、区画整理も進んでいるため、旧地形が窺える場所は無い。現況の遺跡周辺の標高はわずかな差であるが、北より南が低く、東より西が低い。

地下水位は高く、標高0.5m以下では湧水が発生する。現代の水田耕作土底面の高低差にも影響されるが、遺構検出面は標高0.2m～1.0m付近に位置するため、調査には常時排水設備が必要となる。

調査区周辺では、大規模な撹乱を受けている部分もある。撹乱に投棄されたゴミの年代から、浄化センター建設と同時期に掘削された撹乱も確認された。

調査の概要

過去の調査結果から、一色青海遺跡では北西から南東に流下する旧河道が2009年度調査区内で北東に向きを転じ、2018年度調査区中央を北に抜ける状況が検出されている。今年度の調査区は集落中心部の北に位置し、調査区の西端と南東端に旧河道と大溝が検出されることが想定され、ほぼ想定された位置に旧河道、大溝は検出された。

その一方で、集落部分を挟んで旧河道の対岸部分に当たる今年度の調査区中央部分は遺構が希薄で、建物跡や方形周溝墓は検出されておらず、居住域や墓域としての利用は行われていなかったことが判明した。

また、弥生時代に耕作地として利用された可能性を探るため、複数の弥生時代の溝や堆積土と考えられた土壌サンプルを採取しプラントオパールの検出を試みたが、検出されなかったことから、本調査区周辺で耕作が行われた可能性は低いと考えられる。

1面の遺構（中近世）

１面目の遺構は調査区北半部で多く検出された鎌倉～室町時代の土坑（方形土坑）が主なものであり、長辺が２mを超えるものは５基検出された。大型のものは011SK、025SKがあり、011SKは長軸3.8m、短軸2.6m、深さ０.7mを測る。遺物は弥生土器破片も検出されたが、中世に掘削された際に包含したものと考えられる。

2面の遺構（弥生時代中期後半）

弥生時代の遺構は、大溝と旧河道が主で、大溝は調査区西端部で200SD、600SD、旧河道は調査区東西両端で400NRが検出された。200SDから400NRまでの断面を精査するために、調査区西半部に流路に直行する畔を設けた。断面観察による重複関係から、こ

の地に弥生時代中期後半の集落が構えられた最初期に400NRが存在し、400NR埋没後に600SDが新たに掘削され、600SD埋没後に200SDが改めて掘削されたことが断面観察より判明している。これらの遺構は全て弥生時代中期後半に属し、既出の居住域や墓域と並存したことが確認されている。各々の遺構の規模は断面部分で200SDが幅7.79m、深さが1.8m、600SDが幅6.23m深さ1.7m、400NRは幅21.73m深さ２.2m以上である。

出土遺物は過去の調査に比べると点数は少なく、特に状態の良いものは、土器は完形の細頸壺１点、木製品は組合せ鋤1点、板材１点等がある。

200SDの埋没後は、浅い082SD（自然流路・055SD、054SDも同様）が蛇行しつつ流れていた。埋土は特徴的な灰白色のシルトと黒色シルトの互層で、灰白色のシルトは広域に広がる洪水堆積層と考えられている。同じ埋土は2018年度調査区の方形周溝墓の周溝最上層、あるいは200SD最上層部に確認でき、当初は200SDの最上層（最末期）にこの埋土が含まれると考えたが、今年度の調査では、200SDと600SDにまたがる状態で082SDが検出されたことから、200SD埋没後の近い時期に堆積した別の遺構（自然流路）と判断した。この埋土の植物珪酸体の分析により、082SD（055SD、054SD）には生活排水を含まない清流が流れていたことが明らかとなった。

断面に見える地震の痕跡

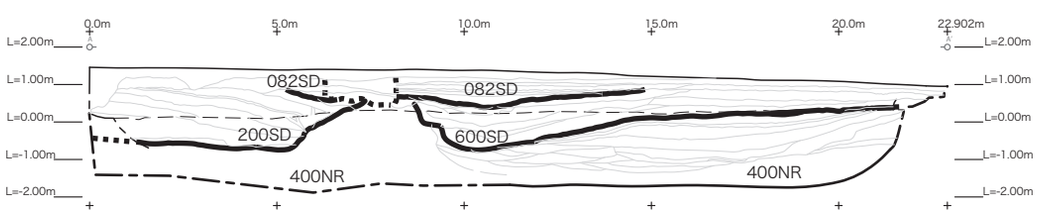
断面観察によると、200SDと600SDの境界付近を中心に地震による影響を強く受けた状況が観察された。地震による影響が観察されるのは、液状化、流動化、砂脈、噴砂がある。性質上最も影響を受けるのが堆積中の砂質であり、液状化の際に強力な浮力を持つことで、周囲の層を変形させるなどの現象も起きている。200SDと600SD境界部分は、400NRが埋没した部分であり、200SD、600SDに比べて砂の堆積が多いことも原因と考えられる。

その他、030SKは炭化物と弥生土器の破片を多く検出した土坑である。平面形は楕円状であり、同様の遺構は、2018年度調査区の234SK、273SKがある。

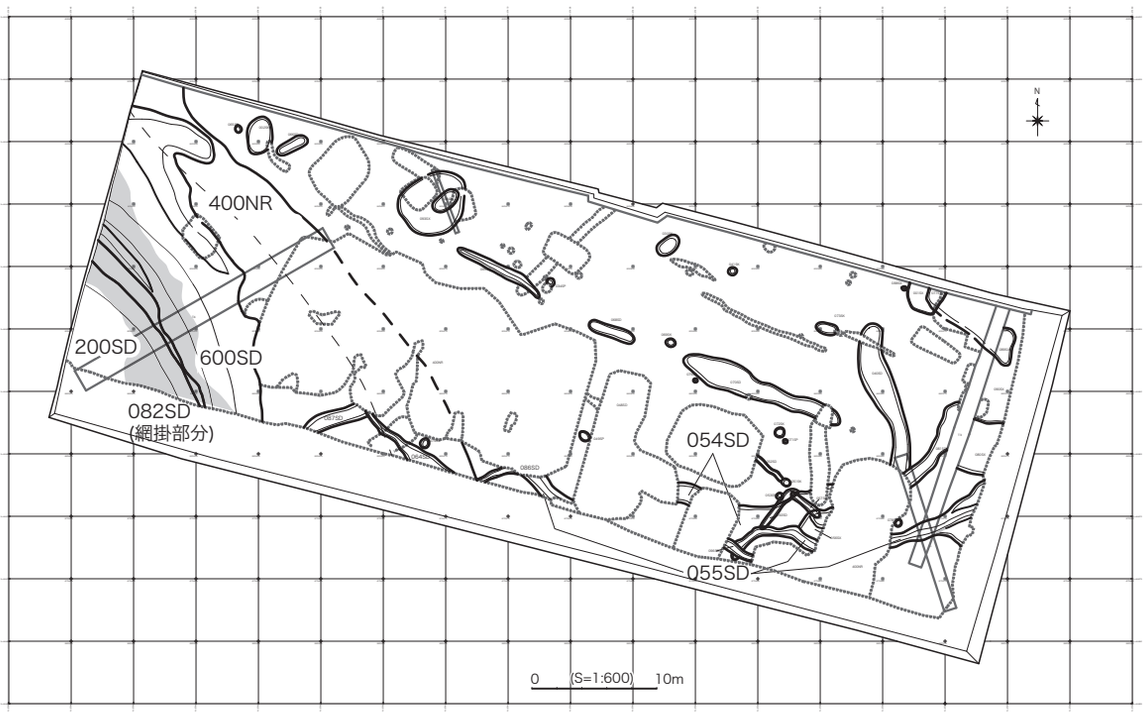
まとめ

2018年度の調査成果から、200SD最上層や方形周溝墓周溝最上層に見られる洪水堆積層は、一色青海遺跡に営まれた集落が洪水等によって居住が困難となった結果、廃絶した可能性を示すと考えた。しかし2019年度の調査では、これらの洪水堆積が200SDの上層には含まれず、200SDや600SD埋没後の別の遺構082SD等として検出され、先述の通り生活排水を伴わない清流であったことが判明した。洪水堆積層が堆積した時点ではすでに集落が存在していなかった可能性が大きい。当然ながらこの時点では大溝や河道はすでに埋没しており、集落の生業に大きく関わる運河としての大溝（200SD・600SD）、河道（400NR）の存否が集落の存続に直結していた可能性も考えられる。集落存続中は400NRの埋没に伴って600SD・200SDが改めて掘削（浚渫）され大溝の機能が維持されたのに対し、200SD埋没後の時点では集落よりも上流部での流路の変化や水量の減少によって大溝の機能が維持できなくなったと思われる。

（鈴木恵介）



082SD、200SD、600SD、400NR断面図（S=1/200）



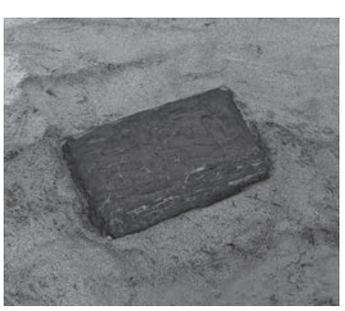
一色青海遺跡 2019年度調査第２面（弥生時代中期）遺構配置図



一色青海遺跡 2019年度調査第２面（弥生時代中期）完堀状況写真



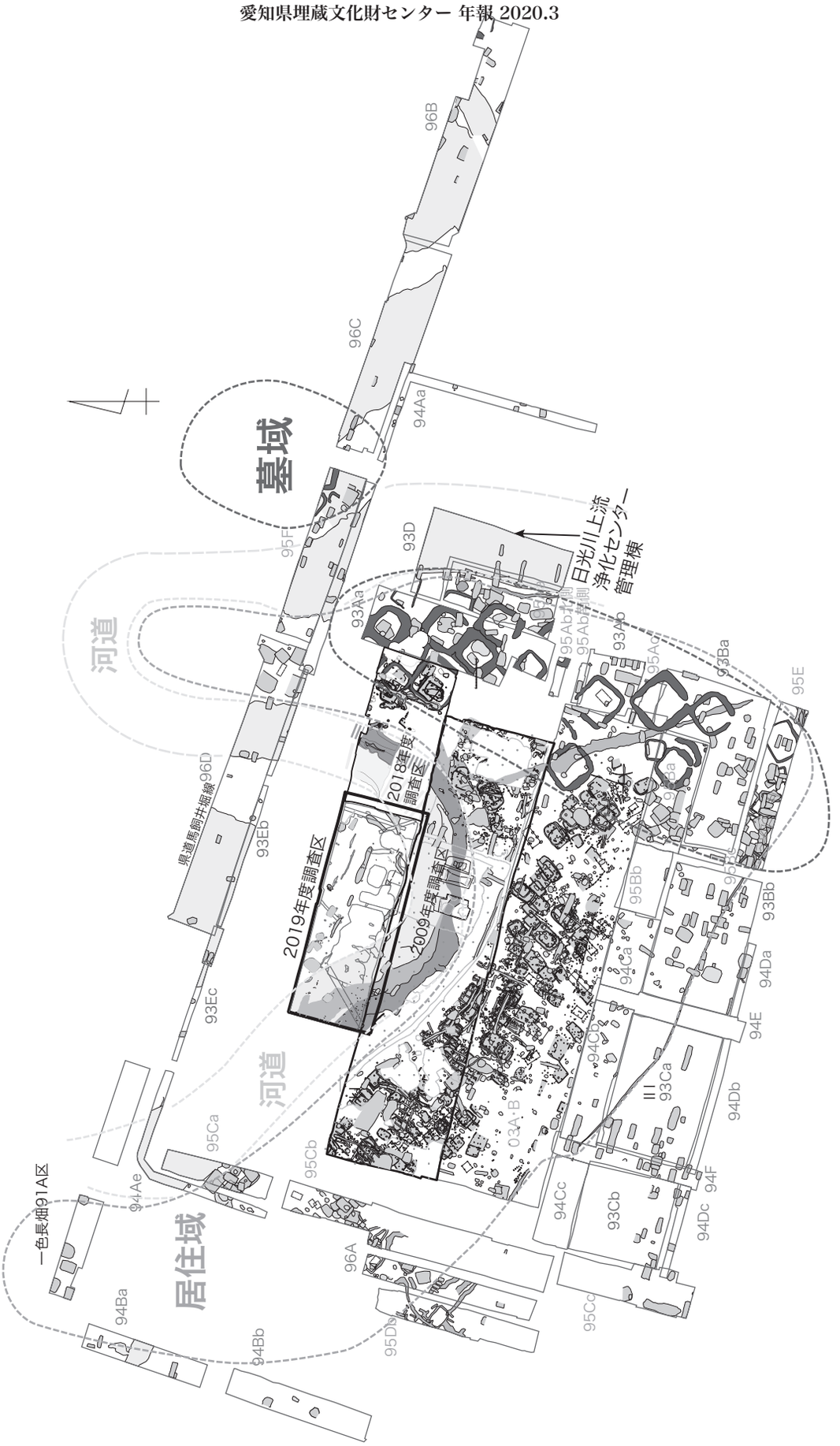
004SK断面（古代～中世）



400NR出土板材（弥生時代中期）



400NR出土細頸壺（弥生時代中期）



一色青海遺跡集落模式図（弥生時代中期後葉　S=1/2,000）

白木（しらき）遺跡（本発掘調査B）

所 在 地　丹羽郡大口町豊田
（北緯35度18分50秒　東経136度52分59秒）

調査理由　一般国道155号道路改良工事

調査期間　令和2年2月～3月

調査面積　370㎡

担 当 者　樋上 昇・早野浩二



調査地点（1/2.5万「小牧」）

調査の経過　発掘調査は道路改良工事（一般国道155号）に伴う事前調査として、一宮建設事務所道路整備課から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。今年度の発掘調査は同年度６月の愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査の結果、国道155号沿いに遺跡が広がることが確認されたことを受けて実施したものである。

立地と環境　白木遺跡は五条川左岸の自然堤防上の縁辺に立地する古墳時代から平安時代の遺跡である。現況は畑地である。遺跡は圃場整備の際に遺物が発見されたことを契機として、昭和47年に緊急調査が実施され、古墳時代の竪穴建物２基、「人」と刻書された奈良時代の須恵器等が検出されている。遺跡の東には径約12mの円墳である白木古墳がある。

調査の概要　今年度の調査区は現五条川に向かって傾斜する地形に相当し、今回の発掘調査で遺跡の西端を確認した。調査区西半は褐色を基調とする包含層状の堆積が確認された。層中の土器は下層が古墳時代前期、上層が古墳時代後期から平安時代の土器を主体とする。

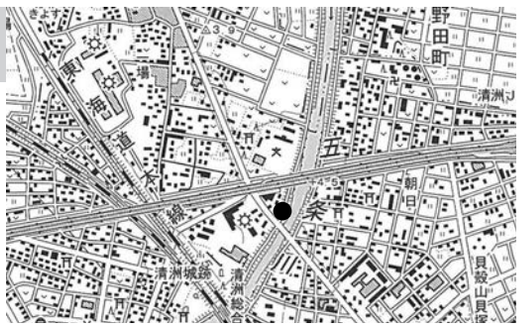
調査区東端は黒色を基調とする古墳時代前期の包含層が良好に残存する。包含層の上面においては、竈を敷設する奈良時代の竪穴建物等、古代の遺構が検出されている。出土遺物には土師器、須恵器、土錘、鉄製品等がある。黄褐色を基調とする基盤砂層上面においては古墳時代前期を主体とする溝、土坑等、多数の遺構が検出されている。（早野浩二）


遺構検出状況（古代）


調査区全景

きよすじょうかまち 清洲城下町遺跡（本発掘調査B）

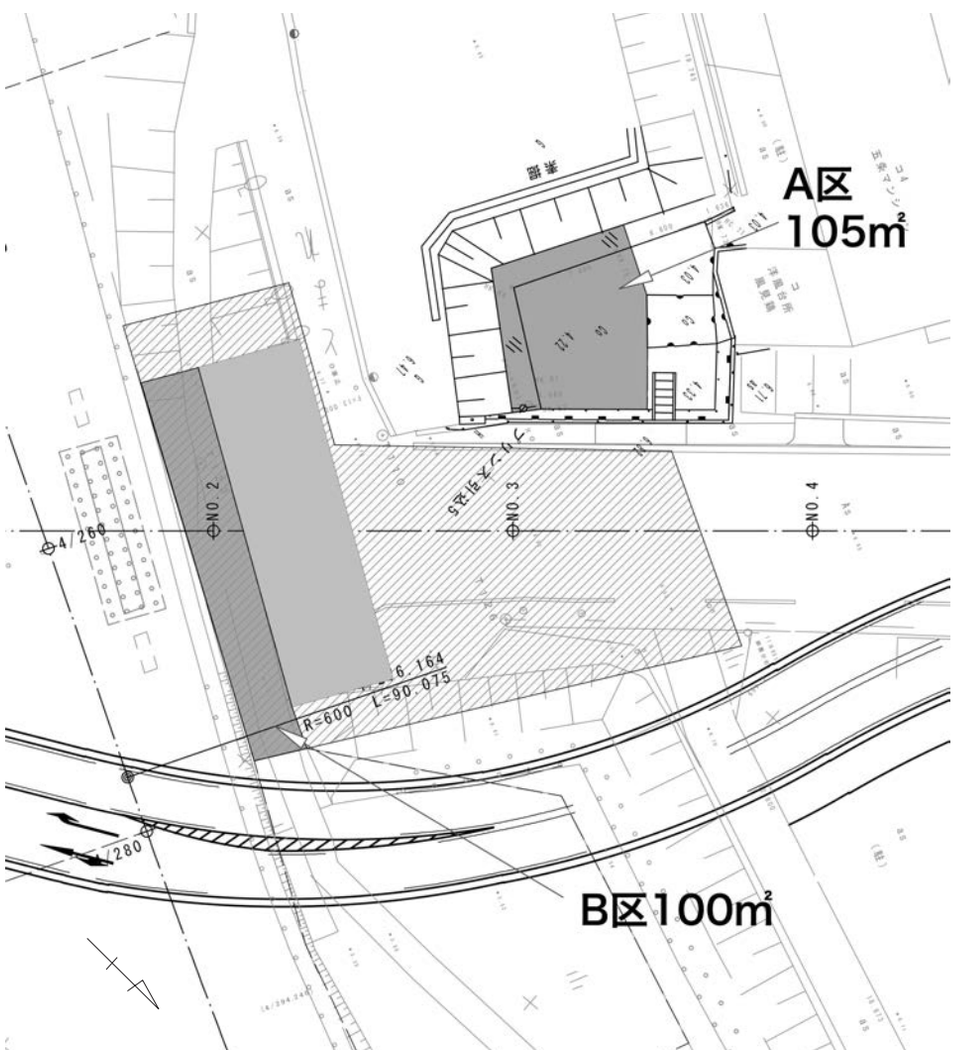
所 在 地 清須市一場矢倉地内
（北緯35度13分09秒 東経136度50分37秒）
調査理由 橋梁整備工事
調査期間 令和2年2月～3月
調査面積 205㎡
担 当 者 樋上 昇



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過 発掘調査は、県道190号線の清洲橋掛け替え工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

調査の概要 清洲城下町遺跡は五条川を城の縄張りに取り入れた近世城郭である。今回の調査は清洲橋の橋梁掛け替えにともない、清洲橋北詰の西側窪地（19A区）と、五条川右岸の清洲橋橋梁直下（19B区）の2か所について発掘調査をおこなうこととなった。調査面積は19A区―105㎡、19B区―100㎡の合計205㎡である。（樋上 昇）



調査区位置図（S=1/500）

朝日（あさひ）遺跡（本発掘調査B）

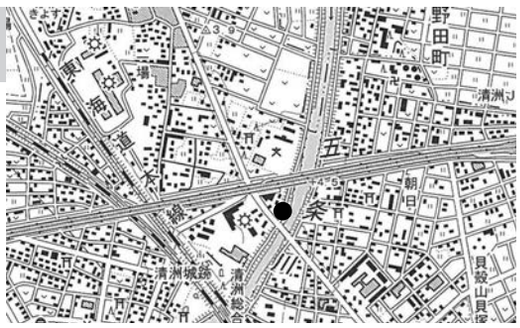
所在地　清須市西田中長堀地内
（北緯35度13分04秒　東経136度51分03秒）

調査理由　新川西部流域下水道事業

調査期間　令和元年12月

調査面積　21㎡

担当者　樋上 昇



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　発掘調査は、新川西部流域下水道工事に伴う事前調査として、愛知県建設局下水道課より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

立地と環境　朝日遺跡は五条川右岸の沖積微高地に立地する。現地表面での標高はおよそ4mを測る。今回の調査区は史跡貝殻山貝塚の西にあたり、弥生時代前期および中期前葉～中葉の環濠集落（中期は南居住域）の西端にあたる。

調査の概要　朝日遺跡の基本土層は、上から現代の盛り土、旧水田耕作土、古墳時代中期の堆積とみられる灰白色シルト層、弥生時代の堆積層である黒褐色シルト層があり、基盤層である灰白色中粒砂層にいたる。しかし、今回の調査では黒褐色シルト層までが完全に撹乱されていたため、最下面の灰白色中粒砂層上面での遺構検出と掘削にとどまった。

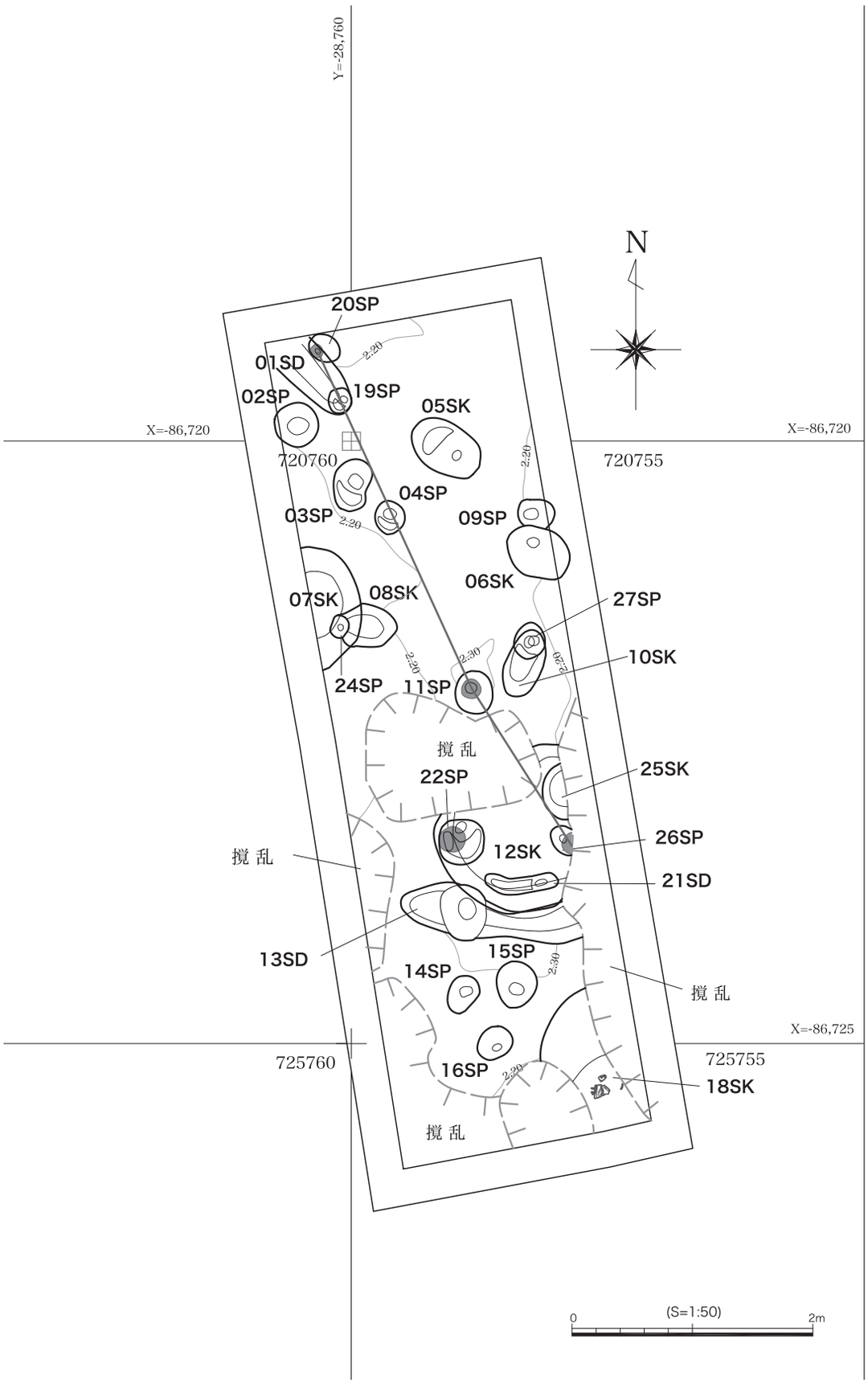
弥生時代前期の土坑07SKのほかは、全て弥生時代中期の遺構と考えられる。うち、調査区南東隅の18SKからは凹線紋系の甕と古井式の壺の破片を確認した。　（樋上　昇）


調査区南半部検出状況（東から）


調査区北半部検出状況（東から）


完掘状況（西から）


18SK土器出土状況（西から）


Y=-28,760
N
X=-86,720
X=-86,720
720760
720755
X=-86,725
725760
725755
20SP
01SD
02SP
19SP
05SK
04SP
03SP
09SP
06SK
07SK
08SK
27SP
10SK
24SP
11SP
攪乱
22SP
25SK
26SP
12SK
21SD
攪乱
13SD
15SP
14SP
攪乱
16SP
18SK
攪乱
2.20
2.30
(S=1:50)
0
2m

遺構全体図（S=1/50）

亀塚（かめづか）遺跡／向田（むかいだ）遺跡（本発掘調査A/B）

所在地　安城市東町・桜井町地内
（北緯34度55分5秒　東経137度5分53秒）

調査理由　中小河川改良事業（鹿乗川）

調査期間　令和２年１月～令和２年３月

調査面積　440㎡

担当者　樋上 昇・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は愛知県建設局河川整備課知立建設事務所による中小河川改良事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて令和２年１月から令和２年３月にかけて実施した。調査対象地の現況は圃場整備を受けた水田であり、近現代の耕作土および床土を除去した検出面より遺構掘削を実施。調査面積は向田遺跡本発掘調査Bが178㎡、亀塚遺跡本発掘調査Bが192㎡、亀塚遺跡本発掘調査Aが70㎡である。

立地と環境　向田遺跡・亀塚遺跡は隣接し、碧海台地の東縁部から沖積低地に広がる鹿乗川流域遺跡群の一部である。調査地は矢作川右岸の氾濫原平野に位置し、旧地形は入り組んだ河道が流れる後背湿地であった。

亀塚遺跡は昭和48年度以降、安城市教育委員会および愛知県埋蔵文化財センターによって調査が実施され、直近の調査は本調査区の南に隣接する愛知県埋蔵文化財センターが行った2016年度の調査となっている。安城市教育委員会が昭和52年度に実施した２次調査で出土した人面文土器はよく知られている。

向田遺跡は、平成12年度に安城市教育委員会によって実施された発掘調査によって存在が明らかとなり、同年度の愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査を経て、平成29年度に発掘調査が実施されている。

調査の概要

亀塚遺跡本発掘調査B　調査は亀塚遺跡本発掘調査Bより着手した。遺構検出面の標高は7.4mで中世の溝（001SD・002SD）、古墳時代前期に埋没したと考えられる河道（003NR）が検出された。001SD、002SD共に古墳時代前期の遺物を多く検出したが、わずかに須恵器甕破片や山茶碗破片を包含することから中世の溝とした。003NRは東西方向の河道で、検出面での幅が約16mである。底面の標高は6.1m。検出された遺物は、完形品を含む古墳時代前期の土器は、器種は壺、甕、高坏が判別できる。木質遺物は加工された建築部材や板材、丸材がある。金属製品では003NR北岸部分で検出された銅鏃2点がある。003NR北岸部に近接して検出された竪穴建物跡（100SI）からも銅鏃1点が出土している。

亀塚遺跡本発掘調査A　亀塚遺跡本発掘調査Aは計12カ所、70㎡を設定した。TT1~TT4では基盤層が標高7.5m前後で検出され、溝や流路の縁辺部がTT1～TT3で検出された。

TT5～TT8では、TT5で柱痕を伴う柱穴2基、土坑1基、TT6、TT7では古墳時代から灰釉陶器や山茶碗破片を含む、厚さ0.2～0.4mの遺物包含層が検出された。これらは中世以降の掘削による再堆積と考えられる。TT8では遺構が標高7.4mで検出され、小土坑14基、溝3条を検出した。遺物包含層の下位やTT5、TT8の検出面以下は今後調査予定である。

向田遺跡本発掘調査B　向田遺跡本発掘調査Bは178㎡の調査区を設定した。調査区北半部には基盤層そのものが存在せず、南端部では土坑2基等を検出した。検出面の標高は6.9mである。（鈴木恵介）



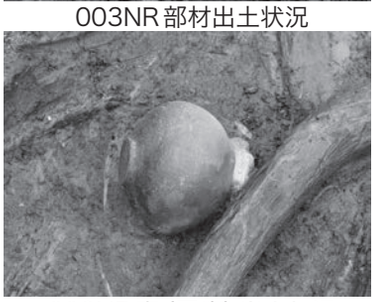
向田遺跡、亀塚遺跡遠景（手前が向田遺跡調査区）



003NR 北岸上層部遺物検出状況



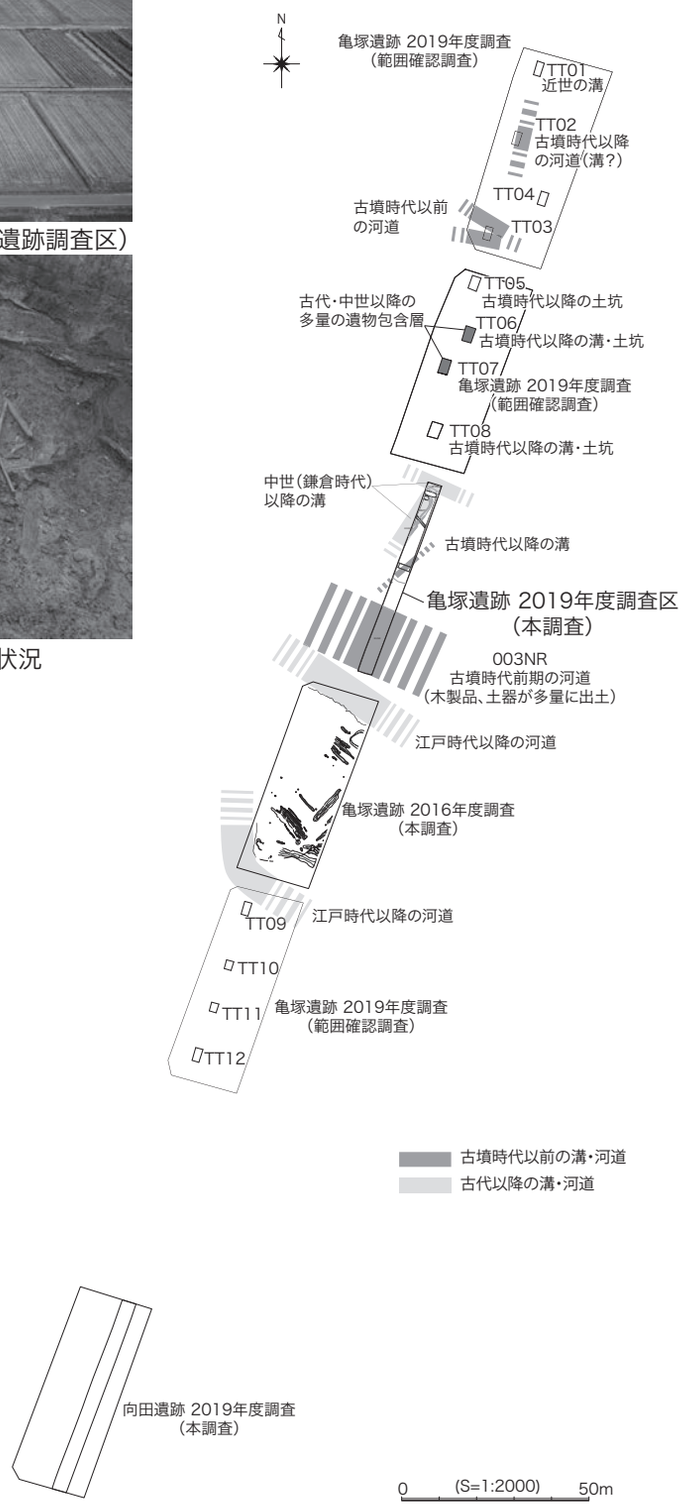
003NR 部材出土状況



003NR 壺（平底）出土状況



003NR 壺（丸底）出土状況



向田遺跡 亀塚遺跡2019年度調査区配置図（S=1/2,000）

万瀬（まんぜ）遺跡（本発掘調査B）

所在地　北設楽郡設楽町川向字マンゼ
（北緯35度06分43秒　東経137度33分54秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　令和元年6月～令和2年1月

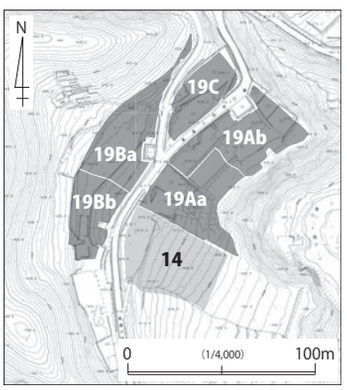
調査面積　8,200㎡

担当者　酒井俊彦・川添和暁・河嶋優輝



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、令和元年６月から令和２年1月にかけて実施した。調査面積は8,200㎡で、19Aa区・19Ab区・19Ba区・19Bb区・19C区の5区に分けて調査を行った。



万瀬遺跡調査区位置図

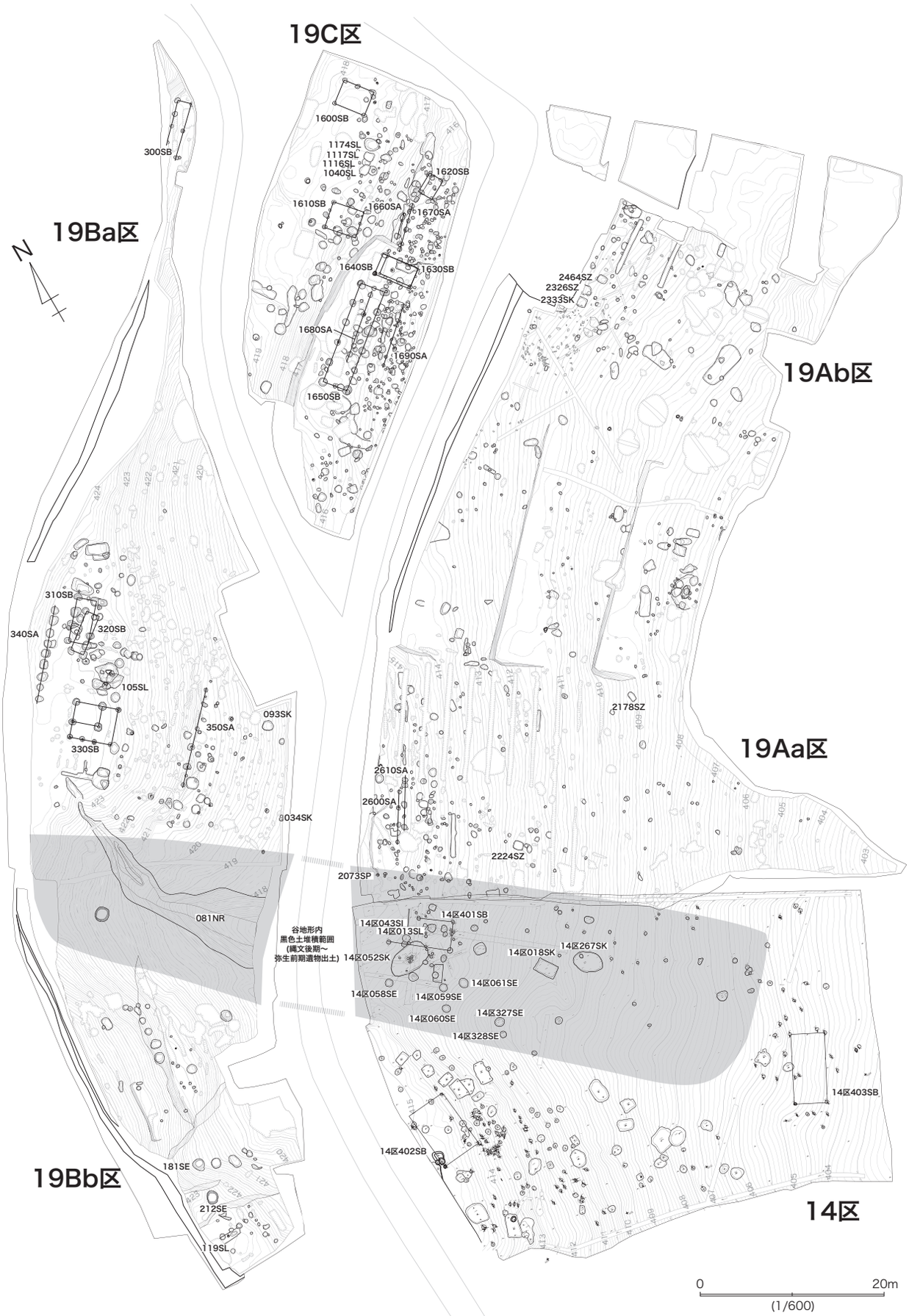
立地と環境　遺跡は、境川に東面する、丘陵末端の緩斜面上に立地する。当地は大畑遺跡の立地する岬状した丘陵の付け根北東側奥部に位置しており、その反対側の南西側奥部には大栗遺跡が位置する。標高は、遺跡範囲中央に横走する県道を挟んで、410～425mを測る。この丘陵自体は片麻岩由来の岩盤によるもので、地形の凹地には第三紀以前の風化による均質な粘土層の形成が所々で認められた。

調査の概要　基本層序は、上から、第1層：表土および近代以降の盛土・耕作土、第２層：中世から近世の黒色土、第３層：縄文時代早期前半以前のにぶい灰黄褐色粘土を主体とする遺物包含層、第４層：黄褐色粘土および礫層（地山）、であった。調査区内は概ね西側（山側）から東側（境川側）に向かっての緩傾斜地ではあるものの、西側から東側に向かって幾筋もの谷地形が刻まれており、それを挟んだ高まりごとに土地利用のあり方に相違が認められる。

確認された、遺構・遺物は下表の通りである。

時代・時期	確認調査区	検出遺構	出土遺物	備考
縄文時代草創期1	Ab区		有舌尖頭器・木葉形尖頭器	狩り場か。
縄文時代草創期2	Ab区	土器横位出土遺構1	表裏縄文土器	当地での活動形成の始まり。
縄文時代早期前半	Aa区・Ab区・C区	竪穴建物跡6、炉穴4、集石炉跡4、遺物包含層（捨て場）	押型文土器・撚糸文土器・石鏃・礫器・剥片石核類・磨石敲石類・石皿台石類	縄文時代集落形成の主体時期。地形と遺構群との関係が良好に分かる。
古墳時代前期	Ba区	土坑1	甕・高坏	
中世～近世	Aa区・Ab区・Ba区・Bb区・C区	掘立柱建物跡約10、柵列、焼土遺構、井戸、土坑墓4、その他土坑・ピット多数	陶器（山茶碗・摺鉢・天目茶碗・水滴・その他近世陶器）、土師鍋（伊勢型・内耳）、砥石、銅銭（寛永通宝）・キセル・火打金・鉄滓	倉庫と考えられる大型の掘立柱建物跡の確認。『設楽町誌』記載の郷倉とお堂に対応する建物跡を確認。
近世以降	Ba区・Bb区	谷地形内遺物堆積	土器（深鉢・注口土器）、石鏃・打製石斧・礫器・剥片・磨製石斧・近世陶器	出土遺物は、縄文時代後期～弥生時代前期主体で、近世陶器が混じる。

以下、中世以降と縄文時代～古墳時代とに分けて調査概要を報告する。なお、近世以降に形成された谷地形埋土は、出土遺物としては縄文時代後期から弥生時代前期に属するものが多いため、縄文時代の中で扱うこととする。　（川添和暁）



万瀬遺跡遺構位置図 古墳時代以降中心 (S=1/600)

中世以降　中世以降の主な遺構として、掘立柱建物跡10棟、柵列跡8条、井戸跡2基、土坑墓4基、炉跡3箇所が挙げられる。

掘立柱建物跡　掘立柱建物跡は19Ba区で4棟、19C区で6棟を確認した。300SBは桁行4間、梁間1間以上、規模6.0m×3.0m以上の掘立柱建物跡である。ピット005SP・007SPでは掘り方内の北西側に大礫を配しており、柱の支えとして据えたものと思われる。310SBは桁行3間、梁間1間、規模4.9m×2.1mの掘立柱建物跡である。320SBと重複するが、ピットの掘り方に切り合いがなく、前後関係は不明である。320SBは桁行2間、梁間1間、規模4.5m×1.5mの掘立柱建物跡である。『設楽町誌　村落誌』(北設楽郡設楽町 2003)掲載の村落略地図には当遺構の付近に「蔵」「堂」の表記が見られ、建物の形態から310・320SBは蔵に相当するものと考えられる。ピット036SKで種別は不明であるが銭貨が出土する。330SB は桁行3間、梁間２間、規模4.6m×3.9mの掘立柱建物跡である。ピット051・052・053・054 SPの掘り方は同建物跡の他のものより大きく、この4基が建物の本体を構成し、他は廂等を構成したものと考えられる。ピット076SPでは柱痕の平面形が方形であることが確認された。建物の形態から、村落略地図の堂に相当するものと考えられる。310・320・330SBは、周辺で出土する陶器・磁器類から18世紀後半～19世紀のものと考えられる。

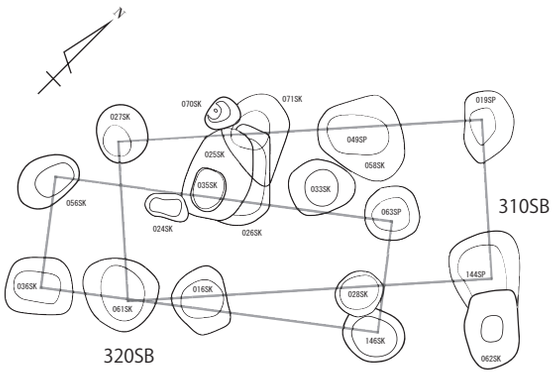
19C区で確認された6棟の掘立柱建物跡のうち、1600SB・1610SB・1620SB・1630SB・1640SBの5棟は規模約2.1～5.5mで住居としての利用が想定される。周辺の出土遺物の時期は15世紀後半から19世紀に渡り、中世から近世にかけて存続した集落跡と考えられる。1630SBは1640SBと重なっており、1640SBをほぼ同じ位置で建て替える際に桁行を2間に変更して規模を若干拡大したものと考えられる。1650SB は桁行5間、梁間1間、規模11.5m×2.8mの掘立柱建物跡である。ピット1262SPでは柱痕跡が方形であることが確認された。ピット1263SPで17世紀後半の遺物が出土し、1263SPに切られる土坑1265SKで15世紀後半の遺物が出土することから、1650SBは15世紀後半以後に建造され、17世紀後半から18世紀に廃絶したものと考えられる。

柵列跡　19Ba区では2条の柵列跡、19C区では4条、19Aa区では2条の柵列跡を確認した。19C区の1680SAは1650SBと重なる位置であり、主軸方向も1650SBとほぼ一致するが、柱筋が通らないため独立した柵列跡とした。

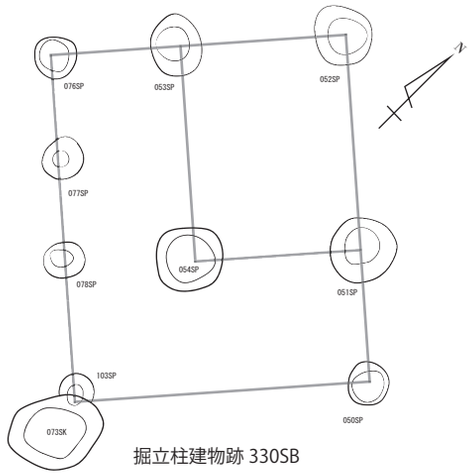
井戸跡　212SEは19Bb区南側、谷地形の肩部付近に位置する井戸跡である。掘り方内に上部は縦板、下部は礫積みで枠を構成し、最下部には加工した丸太材を組む構造で、掘り方は直径1.0～1.1mの円形でほぼ垂直に落ち込む。181SEは谷地形の内部に位置する土坑で、素掘りの井戸跡と考えられる。

土坑墓　2178SZは隅丸方形の平面プランを持つ土坑墓であり、埋土から銅銭5枚が出土した。2224SZはやや胴張りのある隅丸方形の平面プランを持つ土坑墓であり、埋土から銅銭13枚、キセル1本以上のほか、骨片が出土した。以上2基に加え、近代以降の掘削と考えられる2465SDでは銭貨6枚、キセル1本が出土し、墓坑を破壊して溝が掘り込まれたものと思われる。

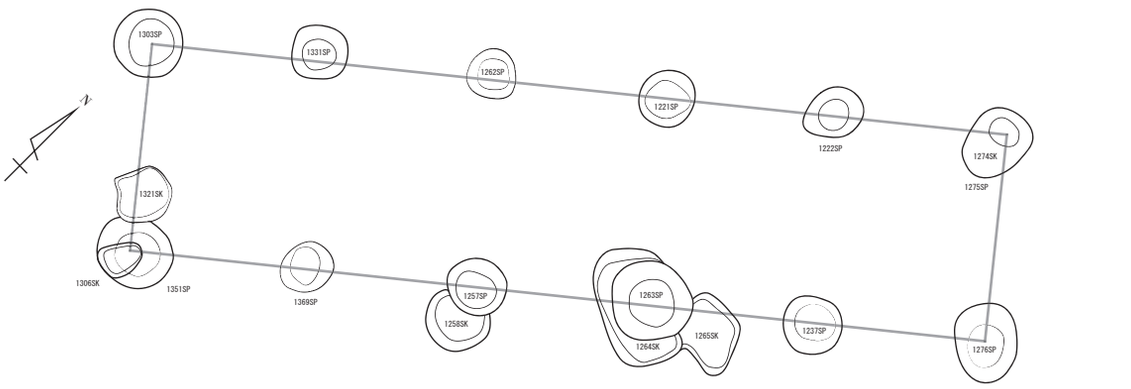
炉跡　105SLは3.2m四方ほどの範囲で6度にわたって利用された炉跡であり、遺構埋土内には陶器・磁器片のほか、炭化物と被熱した大礫が多く含まれる。199SLは幅0.8m、長さ2.3m以上の溝状の炉跡である。1040・1116・1117・1174SLは1610SBの北東方に位置する炉跡群で、隅丸方形あるいは円形の炉跡が4基連続する。



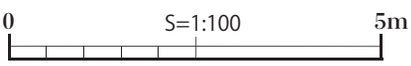
掘立柱建物跡 310SB・320SB

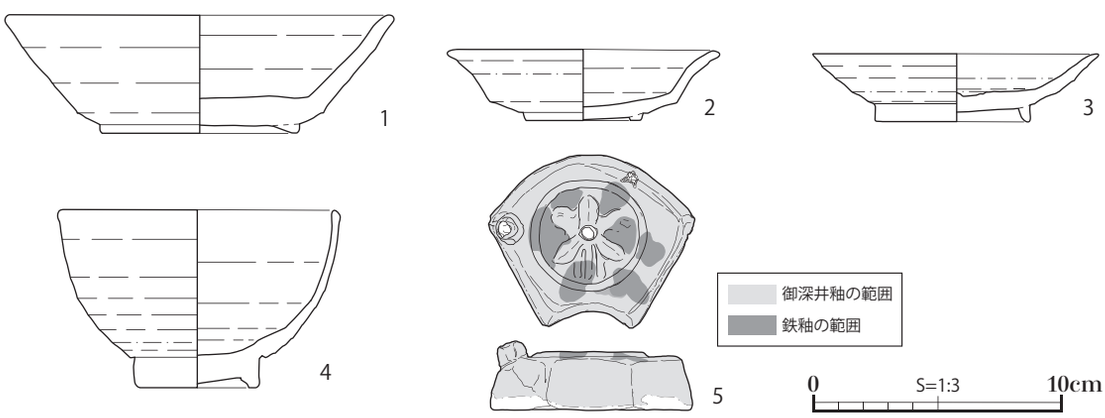


掘立柱建物跡 330SB



掘立柱建物跡 1650SB





万瀬遺跡　中世以降の遺構・遺物

出土遺物　今年度調査における中近世遺物の多くは19B区から19C区にかけて出土し、特に掘立柱建物跡周辺に多い。それに対して19A区からの出土は少数にとどまる。中世に属する遺物としては山茶碗、伊勢型鍋、擂鉢、腰折皿、平碗、端反皿、内耳鍋などが挙げられ、19C区に多く、19B区ではごく少数である。近世に属する遺物としては天目茶碗、皿、端反碗、広東碗、鎧茶碗、腰錆碗、擂鉢、水滴、銅銭、キセルなどが挙げられる。銅銭のうち文字を確認できたものは全て寛永通宝である。

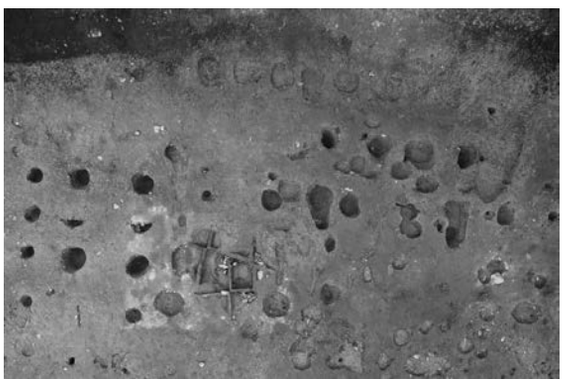
中世以降の遺物で全体が復元できたものの一部を掲載する。1は034SK出土の渥美湖西型山茶碗。復元口縁部径15.6cm、高台径8.0cm、器高4.7cm、13世紀中葉。2は1265SK出土の灰釉腰折皿である。復元口縁部径10.9cm、復元高台径4.9cm、器高2.8cm、15世紀後半。3は19B区表土出土の皿である。復元口縁部径11.5cm、高台径6.3cm、器高2.7cm、18世紀代。4は1263SP出土の丸椀である。復元口縁部径11.3cm、高台径5.0cm、器高7.1cm、17世紀後半から18世紀。5は212SE出土の水滴である。底幅8.3cm×6.3cm、器高2.8cm、扇面形で御深井釉の掛かる上面には丸に立ち沢瀉の意匠。17世紀後半。　(河嶋優輝)

古墳時代

19Ba区093SKからは、古墳時代初頭の甕・高坏片が出土した。大栗遺跡でも同時期の土器片が採取されており、今後も近隣で当該時期の活動痕跡が見つかる可能性がある。

谷地形内堆積物

19Ba区と19Bb区の境付近には谷地形が検出され、黒色の埋土中からは縄文時代後期中葉から弥生時代前期の土器片や石器がまとまって出土した。この黒色土からは若干ではあるが近世陶器片も出土し、かつ14区では中世以降の遺構を覆っていたものである。従って



Ba区 310SB・320SB・330SBと105SL(上が西)



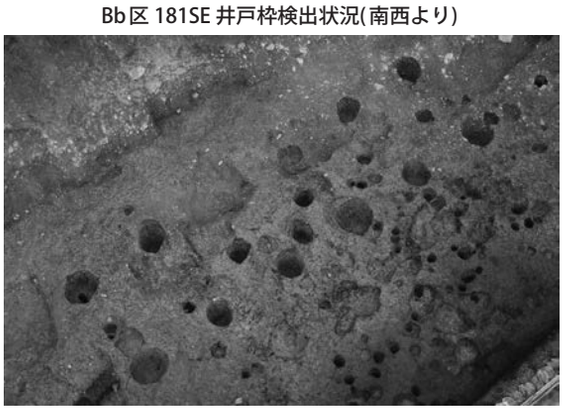
Ba区 105SL 充填された礫検出状況(東より)



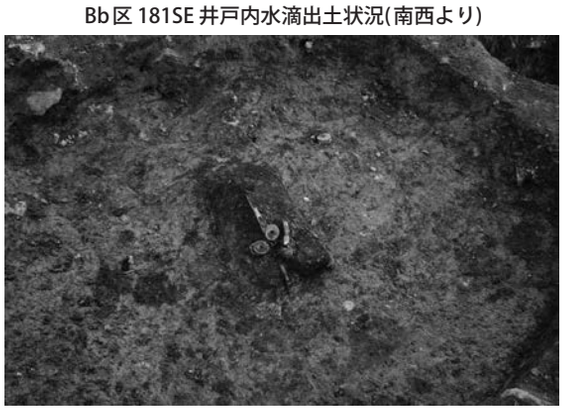
Bb区 181SE 井戸枠検出状況(南西より)



Bb区 181SE 井戸内水滴出土状況(南西より)



C区 1650SB(上が北西)



Aa区 2224SZ 銅銭・キセルなど出土状況(南西より)

この黒色土の堆積は近世以降と考えられ、縄文・弥生時代の遺物は、周囲からの二次的な混入である可能性が高いと考えられる。

縄文時代早期前半の集落跡

遺跡範囲の北側、19Aa区・Ab区・C区にまたがる50×60mの範囲では、縄文時代早期前半を主体とする集落跡が見つかった。検出された遺構は、炉穴4基（1572SL・2116SL・2127SL・2445SL）、集石炉跡4基（2400SL・2447SL・2448SL・2449SL）、竪穴建物跡6基（1700SI・1710SI・1720SI・1730SI・1740SI・2460SI）と、捨て場と考えられる遺物包含層（2500SX）である。遺物包含層は径1cm弱の礫を多く含むにぶい灰黄褐色粘土層で、道路を挟んで19C区と19Ab区を挟んだ範囲で良好な状態で検出された。包含層の斜面上方に当たる19C区東端では、重複をした状態で竪穴建物跡が計5基見つかった。いずれも径4～5mほどの多角形を呈する平面プランで、皿状の底面を有する。中央には炉跡は認められないものの、建物跡底面や縁にはピットが複数認められた。ここでは先行する竪穴建物跡がある程度埋没してから、次の竪穴建物跡が構築された様子を確認することができた。

竪穴建物跡の重複

炉穴

炉穴は平面プラン長楕円形を呈するものが多く、長軸1～2m弱・短軸0.6～0.8mほどの法量を有する。機能時の被熱部分および埋土の状況などから、いずれも複数段階での機能面が確認されている。2127SLは元来はトンネル構造を持つ煙道付炉穴であったと考えられるが、その後板石を入れるなどして構造を改変してさらに繰り返し利用された様子を確認することができた。

集石炉跡

集石炉跡は4基確認したが、いずれも竪穴建物跡2460SIの埋土内であった。2460SIの建物跡としての利用が終了して、ある程度埋没した凹地状のところに、炉跡としての使用が繰り返し行われたと考えられる。炉跡はいずれも長径0.6～0.8m程度の浅い凹地状を呈するもので、焼土・炭化物を多く含んでいた。

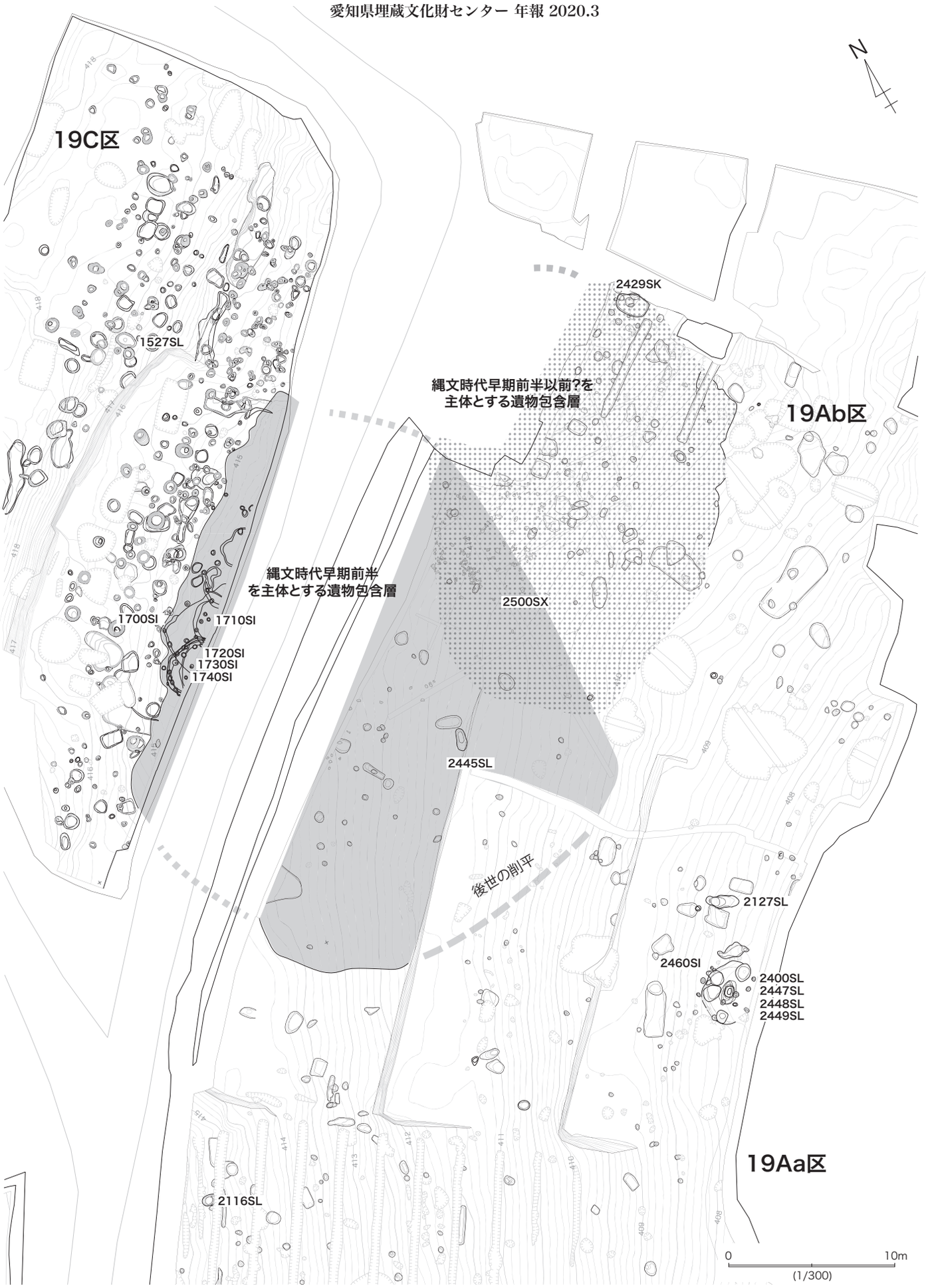
捨て場

谷地形内では、土器・石器を多く含む堆積層を確認した。にぶい灰黄褐色粘土層の分布する北東端が、谷地形としては最も深い部分に当たる。ここからは上に記した遺構同様に、早期前半の押型文土器が出土する。包含層内には、径20cm程度の角礫が固まっている場所があり、人為的な利用後に廃棄された可能性が考えられる。谷地形では、礫を多く含むにぶい灰黄褐色粘土層の下に、礫を含まない褐色粘土層の堆積があり、その範囲は谷地形対岸の北側に向かって広がっていた。この堆積土からは、押型文土器の出土もあるものの、多縄文系土器の出土も認められた。

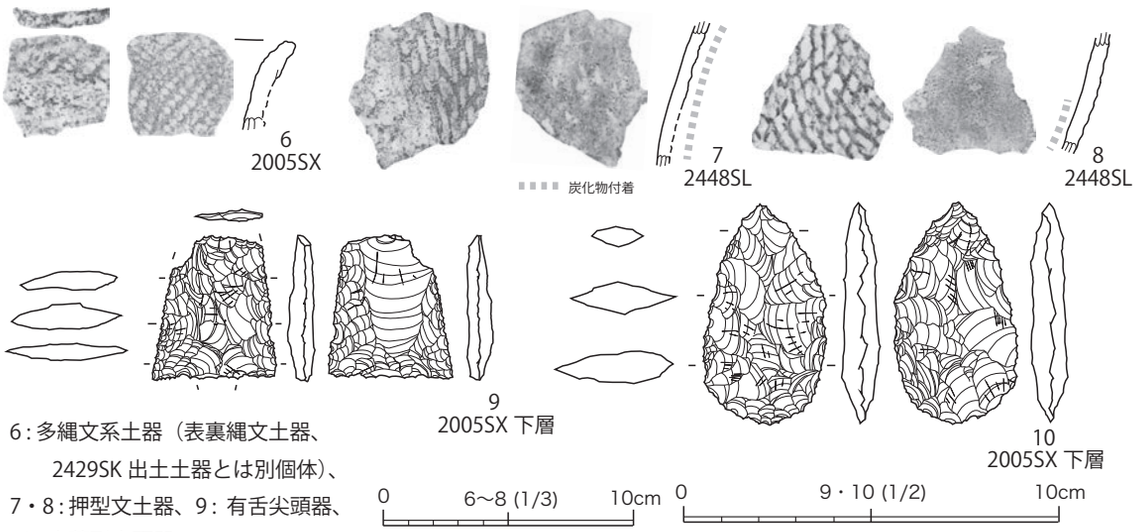
礫を含まない褐色粘土層の堆積が展開する北端からは、注目すべき遺構が見つかった。2449SKは2.0×1.2mを測る浅い凹地であり、もともとは古い段階の倒木痕由来の凹地が存在していた場所であったと考えられる。その凹地内から、表裏縄文土器が一個体分、横位の潰れた状態で出土した。底部は見当たらないものの、口縁部から胴部下半まで良好に残存していた。現在、接合・復元作業が行っていない状況であるが、器壁が5mm程度と薄手で、器形などから、草創期に遡りうる可能性が考えられるものである。万瀬遺跡の縄文時代集落跡には、他にもこの時期まで遡る遺構が見つかる可能性があろう。

出土遺物

出土遺物は、早期前半の大川式をはじめとする押型文土器や撚糸文土器も見つかっている。2449SK出土土器の様に多縄文系土器群のなかには草創期末まで遡りうるものもあるかもしれない。石器には、石鏃・礫器・剥片石核類・磨石敲石類・石皿台石類の出土があった。また、2500SXの下層からは、縄文時代草創期に属する有舌尖頭器と木葉形尖頭器がそれぞれ1点ずつ出土した。川向東貝津遺跡に近い当地は、これら尖頭器が使われた時期は、狩猟の場として利用されていたものと考えられる。（川添和暁）



万瀬遺跡遺構位置図 縄文時代早期前半中心（S=1/300）



6 : 多縄文系土器（表裏縄文土器、
2429SK 出土土器とは別個体）、
7・8 : 押型文土器、9 : 有舌尖頭器、
10 : 木葉形尖頭器

万瀬遺跡 縄文時代早期前半以前の出土遺物



C区 1700SI完掘および1710SI・1720SI検出（南西より）



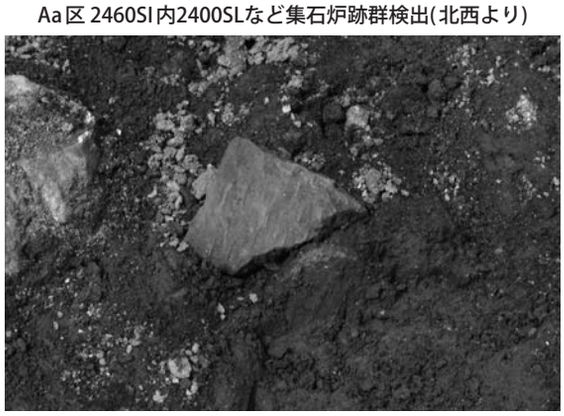
C区 竪穴建物跡群完掘削状況と東壁（南西より）



Aa区 2460SI内2400SLなど集石炉跡群検出（北西より）



Aa区 2127SL 土層断面（南より）



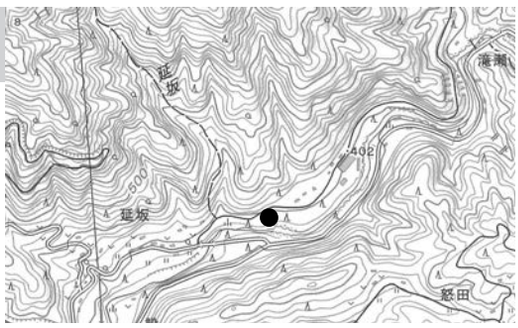
C区 1527SL 押型文土器出土状況（南東より）



Ab区 2429SK表裏縄文土器出土状況（北東より）

石原（いしはら）遺跡（本発掘調査B）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分55秒 東経137度34分22秒）
調査理由　設楽ダム
調査期間　令和元年5月～令和元年11月
調査面積　6,800㎡
担当者　酒井俊彦・武部真木・田中良



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　石原遺跡は、豊川上流の境川右岸に所在する（川向地区）。石原遺跡とその周辺では、主に境川右岸に発達した河岸段丘および沖積地からなる平坦面や緩斜面が分布しており、やや開けた谷地形となっている。上流部の左岸域に立地するマサノ沢遺跡では、平成29年度の発掘調査でハート形土偶が出土している。石原遺跡は、隣接する下延坂遺跡とともにマサノ沢遺跡の対岸に位置し、その範囲は、標高394～403mの緩斜面を中心に一部は北側の斜面（標高405～418m）にも及んでいる。これらの遺跡は、平成28年度に当センターによって範囲確認調査が行われている。

調査の概要　今年度は、町道より北側の19A区、町道より南側の19B区、その南西の19C区にて調査を実施した。19A区と19B区では、上位の山からの何層にも及ぶ大規模な土石流を検出した。19C区では、境川寄りの低い谷地形から縄文時代後期末から弥生時代前期までの遺物包含層を検出した。

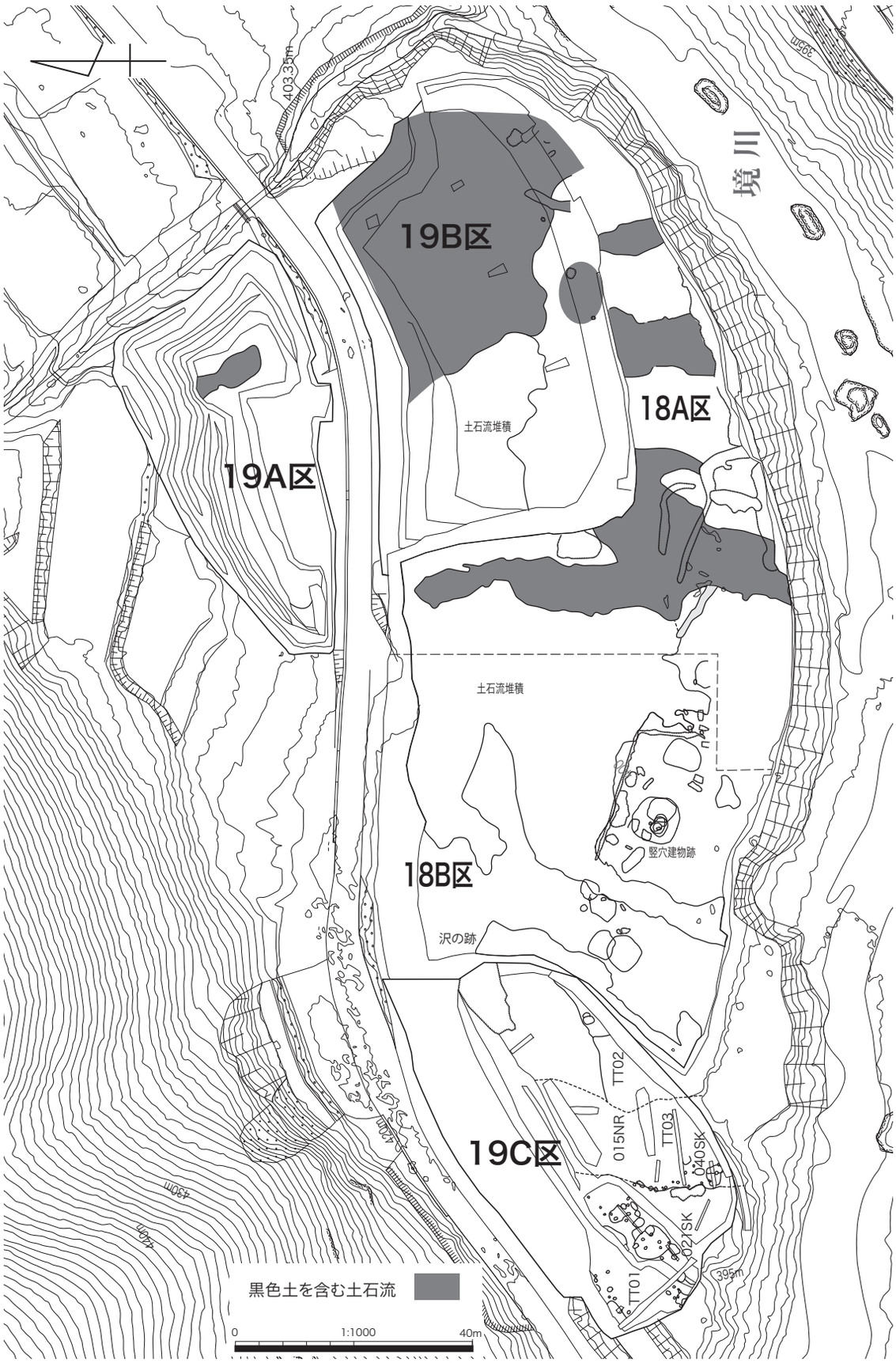
19A区　19A区は幾重にも重なる土石流が調査区全体を覆っており、東側では層の厚さが1m以上で、直径1m以上の巨礫が含まれる大規模な土石流が確認された。それらの土石流の下層からは、摩滅した縄文土器片や石鏃などが見つかった。

19B区　19B区は、砂層が19A区と同様の土石流に覆われている。その土石流が比較的薄い南側では、砂層が堆積している部分で、一部沈鉄混じりの二次堆積と思われる黒色土が堆積しており、そこから摩滅した縄文土器片や数点の黒曜石を含む剥片などが合わせて30点余り出土している。

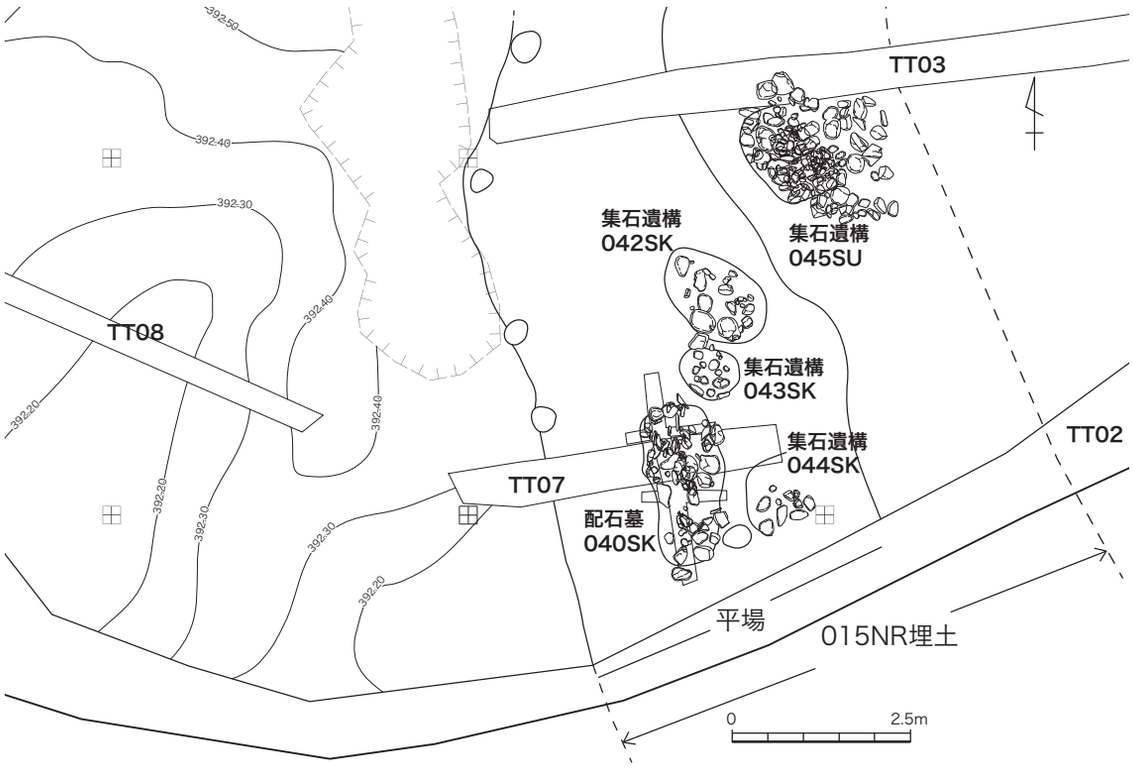
19C区　19C区は、土石流と造成により、上・中段が大きく土地改変が行われている。その改変が及んでいない下段では縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての谷地形と黒色土の遺物包含層と配石墓などの遺構が検出された。

021SK　土坑(021SK)は、長さ2.35m幅1.45m深さ0.55mである。この土坑からは、摩滅した土器片や石鏃、剥片などが10点ほど出土し、黒曜石製のものが半数を占める。中段の遺構としては多くの遺物が出土している。

015NR　谷地形(015NR)は、縄文時代後期末から縄文時代晩期の包含層(黒色土)と、縄文時代晩期から弥生時代前期の包含層(暗褐色土)が堆積している。谷地形の大きさは、南北約20m、東西約15mとなるが、半分以上が土石流によって壊されており、黒色土と暗褐色土の遺物包含層が良好に残っている範囲は右岸域長さ約7~8mの範囲である。この谷地形からは、煤の付着した土器片が大量に出土しており、そのほとんどが煮炊きに使用されたと考え



遺跡全体図（S=1/1,000）



谷地形015NRとその周囲の遺構(S=1/50)



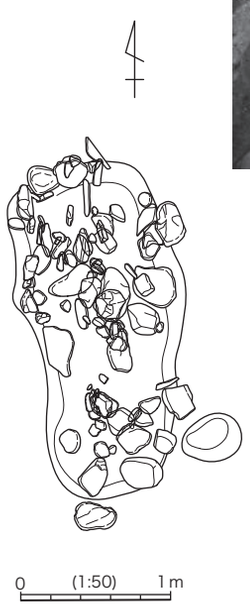
北側の掘り方(西から)



040SK検出状況(東から)



北西側の掘り方土器出土状況(西から)





040SK完掘状況(北から)

配石墓040SK(S=1/50)

られる。また、土器の出土傾向から、トレンチ(TT03)の辺りを境いに上流域部に弥生時代前期の条痕文土器が多く、それより下流域部ではほとんど出土していない。縄文時代晩期後葉の突帯文土器は015NRに広く分布しており、全体の土器の半分以上の割合を示す。縄文時代晩期中葉以前の土器は、ほとんどが下流域部で出土しており、配石墓（040SK）の掘り方には縄文時代晩期初頭以前の包含層が残っていた。このことから、包含層が形成される過程にも時期差があることが判明した。015NRの包含層が形成される以前の状況は、平場となっており土坑が数基掘り込まれているが、積極的な利用はされていない。周辺の遺構の状況から考えると、土器の廃絶が一時的に止まった段階で、配石墓040SKや集石遺構042SK、043SK、044SK、045SUが構築され、煮炊きなどが集中的におこなわれ、再び廃棄が継続したと思われる。集中的に煮炊きなどで利用していた時期は、土器の出土量から縄文時代晩期後葉と考えられる。

出土した石器は、打製石斧や磨製石斧、礫器、磨石、敲石、台石などの加工具が多く、石鏃は10点以下と少ない。このような石器組成の偏りからは、植物質食料を積極的に利用していたことが伺える。この点は、土器の内面に付着した煤の分析と合わせて検討することで、当時の人々の食性やこの地で何を煮炊きしていたのかより明らかになると思われる。

040SK　配石墓(040SK)は、石が縦向きに2列配石されており、埋土に骨片や骨粉を含んでいることから配石墓であると考えている。長さ2.45m幅1.1mで、縄文時代晩期初頭の土器を含む包含層を掘り込んで構築され、埋土中から突帯文土器が出土していることから、縄文時代晩期後葉以降のものと考えられる。

042SK
043SK
044SK　集石遺構とした(042SK・043SK・044SK)は、被熱した礫を含んでいる。015NRの埋土(黒色土)中に構築されており、掘り方が確認出来なかった。黒色土中には片麻岩の亜角礫や亜円礫が多く含まれているため、人為的な遺構ではない可能性もあるが、被熱した礫や安山岩が構成礫に含まれているため、集石遺構と考えている。掘り方が不明瞭であるのは、黒色土が堆積していく過程で、掘り込まず、地面に配置したためだと考えている。出土している土器と共に煮炊きに利用されたと考えられる。

045SU　045SUは042SK・043SK・044SKと同様、被熱した礫を含む集石遺構と考えられる。辺り一面に礫が堆積しているが、045SUに棒状の亜角礫や被熱した礫が含まれていたため、一つの集石遺構として捉えた。045SUを構築する礫は、他の集石遺構よりも大きな礫が利用されている。

ま と め

今回の調査では、昨年度とは異なる時代の遺構や遺物が検出された。中でも、昨年度調査区の18B区は、縄文時代中期前半の竪穴建物跡とそれに伴う遺物が出土していたが、隣接する19C区ではそれよりも新しい、縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての遺構や遺物が検出された。この全く異なる時代の遺跡が展開していたことは、当時の人々の生活環境を考察する上で、重要な事例となるであろう。また、19C区の谷地形(015NR)は、縄文時代後期末から弥生時代前期にかけて形成されているため、当時の人々がこの近辺に継続して居住していた可能性が高い。土器の廃棄量から推察して、あまり遠くない場所に集落が形成されていたと考えられるため、今後の調査で発見されることが期待される。

(田中　良)



石原遺跡全景(19A区調査時)



19A区全景（南東から）



19B区全景（南から）



19B区南壁（北から）



19C区全景（東から）



谷地形015NR黒色土検出状況（南から）



谷地形015NR土層断面TT03（南西から）



谷地形015NR遺物出土状況（北から）



040SK完掘状況（南東から）



042・043SK検出状況（東から）



044SK検出状況（東から）

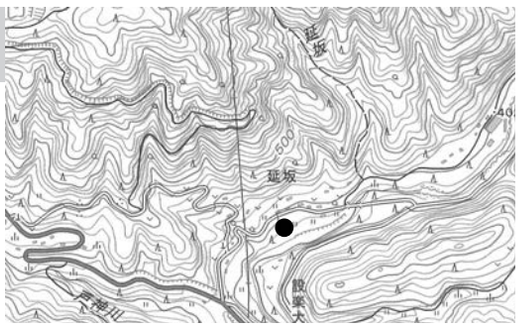


045SU検出状況（西から）



谷地形015NR完掘状況（東から）

上ヲロウ（かみ）・下ヲロウ（しも）遺跡（本発掘調査B）



調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分50秒 東経137度34分03秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　令和元年5月～令和元年9月

調査面積　3,600㎡

担当者　酒井俊彦・永井宏幸・宮腰健司

調査の経過　本年度の発掘調査は、平成28年度本発掘調査A（範囲確認調査）の成果を踏まえて設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

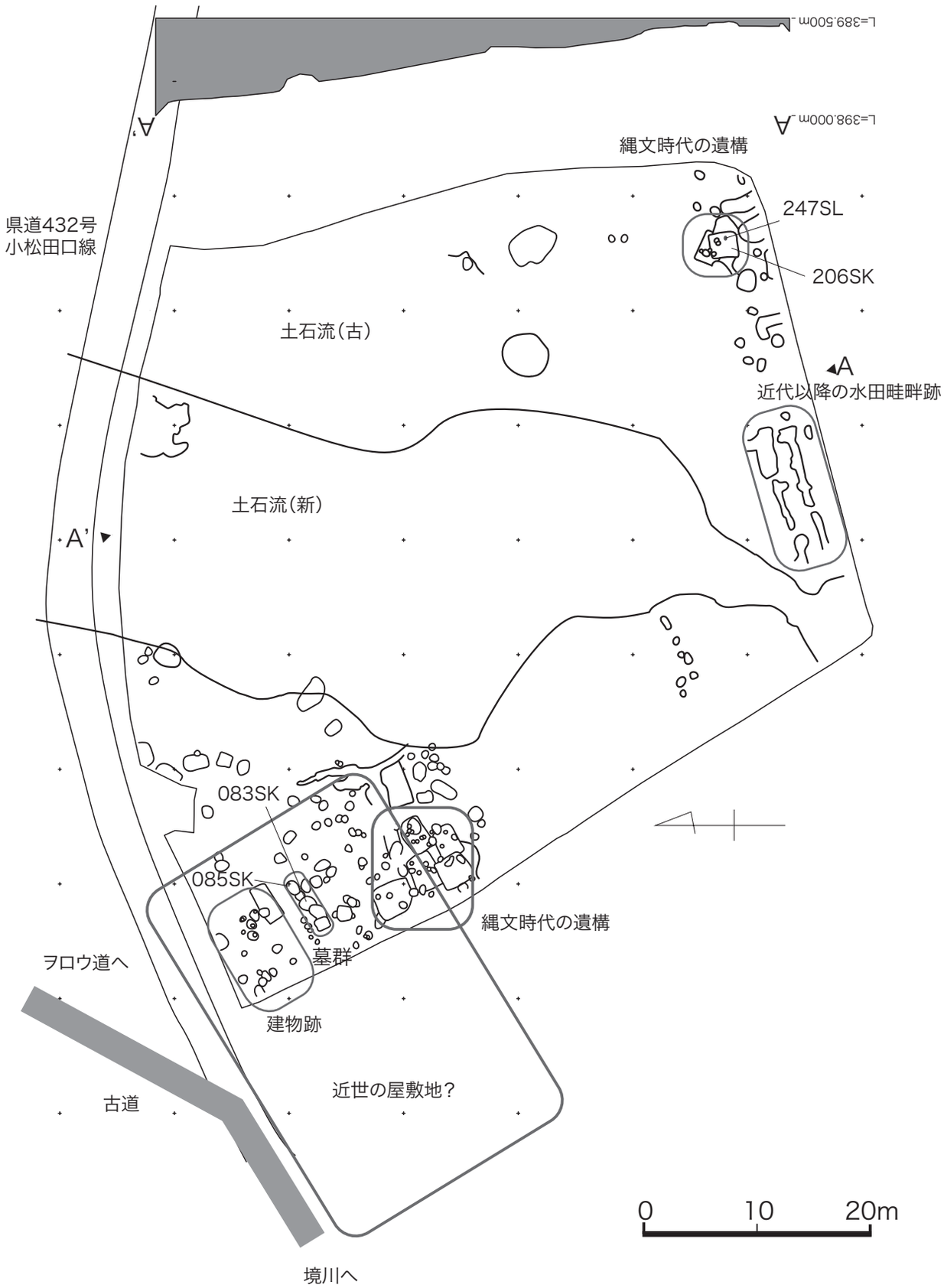
立地と環境　遺跡は、豊川水系境川右岸の河岸段丘から山地へ上がる緩斜面に立地する。今回の調査区での比高差は8.5mある。隣接する周辺の遺跡としては、遺跡の上流に石原遺跡、下流に万瀬遺跡、境川を挟んで対岸に笹平遺跡がある。今年度の発掘調査は、遺跡の中央を横断する県道432号小松田口線の南側境川寄りを行った。

調査の概要　遺跡の現況は、農地として利用されていた。片麻岩を高いところでは２ｍ以上積み、緩斜面に数段の平坦面が造成されていた。この造成に関わる表土を除去すると調査区中央におびただしい砂礫層を含む土石流が展開する。土石流の時期は限定できないが、土石流の影響の及ばないところに縄文時代晩期を中心とする遺構群、江戸時代後半の遺構群が確認された。

江戸時代後半の屋敷地と考えられる遺構は、調査区北西寄りに展開し、県道に隣接して建物跡と思われる柱穴を５基以上確認した。柱間を推定できるような配置は確認できなかったものの、建物跡を構成する柱穴に、柱痕跡を断面確認した遺構が５基程度あった。これら柱穴の南側を東西方向に並列し、１ｍ四方、深さ0.5m前後の不定形な土坑を５基確認した。これらのうち、東端の土坑085SKから広東碗と煙管、中央の土坑083SKから皮革で包んだ煙管が出土した。土坑群のうち２ヶ所から副葬品に相応しい遺物が出土したことと、座葬を想定できる土坑の規模であったことから、人骨などは確認できなかったが墓壙と考えられる。また、これら江戸時代の遺構群の南東隅に逆Ｌ字状の溝を確認した。おそらく屋敷地を囲む溝として配置されていたと思われる。なお、この溝の上位には拳大前後の礫が埋設されていた。江戸時代の遺構群は、県道を挟んで遺跡の南西から北西に向かって延びる道が元文元（1736）年作成の川向村絵図に記載されており、この道沿いの屋敷地と考えられる。

江戸時代の遺構群に南接して2m四方前後の方形遺構を５基程度確認した。出土遺物は縄文時代中期から晩期、弥生前期におよぶ土器、石器がある。遺構は明確に輪郭が確認できたものの、掘りかたは不明瞭であった。その理由としては、遺構埋土の土質が基盤層と明瞭に分層できなかったことにある。

調査区南東寄りに縄文時代晩期を中心とする2～３ｍ前後の方形遺構を５基前後確認した。調査区北西寄りの方形遺構群とは異なり、複雑に重なって確認された。全てが竪穴建物かは確定できなかったが、プランのほぼ中央に焼土と炭化物を伴う石囲炉247SLを付設する206SKは、長軸2.9m、短軸1.8mを測る方形の竪穴建物である。　（永井宏幸）


L=389.500m
A
L=398.000m
A'
縄文時代の遺構
247SL
206SK
県道432号
小松田口線
土石流(古)
A
近代以降の水田畦畔跡
土石流(新)
A'
083SK
085SK
縄文時代の遺構
墓群
ヲロウ道へ
建物跡
近世の屋敷地?
古道
0
10
20m
境川へ

遺構全体図 (S=1/500)

大空前遺跡（本発掘調査A）

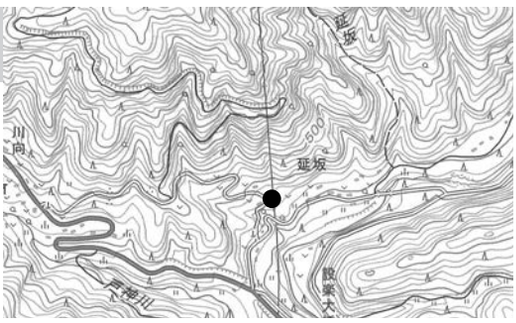
所 在 地 北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分51秒 東経137度33分52秒）

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和元年５月

調査面積 80㎡

担 当 者 酒井俊彦・永井宏幸・宮腰健司



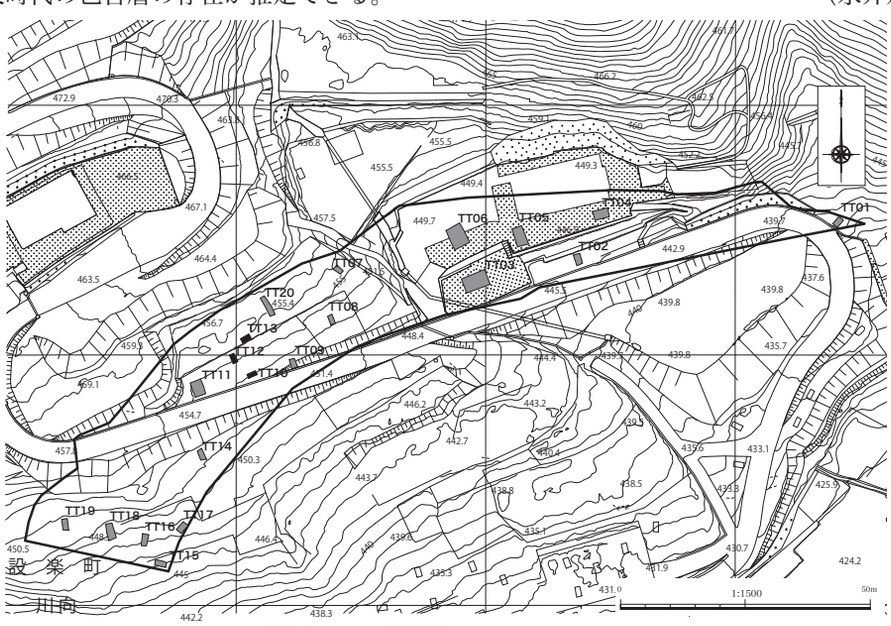
調査地点（1/2.5万「田口」）

立地と環境　遺跡の標高は430～488mで、斜面地に立地する。遺跡の南西端には万瀬遺跡との間に沢がはいる。また、遺跡のほぼ中央と東端にも沢がみとめられ、東端の沢は上ヲロウ・下ヲロウ遺跡へと続く。

調査の概要　大空前遺跡の本発掘調査Aは、平成28年度にダムの湛水域である標高437mまでの範囲を実施している。今回の調査は湛水域より上位に予定されている県道建設予定地にあたる。調査対象地は地形から大きく４つに区分できる。遺跡の東端の沢辺り（TT01）、中央の沢東側（TT02～06）、中央の沢西側の茶畑付近（TT07～13・20）、町道の南側（TT14～19）である。

中央の沢西側の茶畑付近（TT07～13・20）は大規模な造成による改変が認められなかった地区である。特にTT10・12・13は黒褐色砂質シルトが堆積し、下位に堆積する暗褐色シルト層とともに安定した層序が認められた。TT10からは縄文土器、TT12からは縄文土器と打製石斧が出土した。

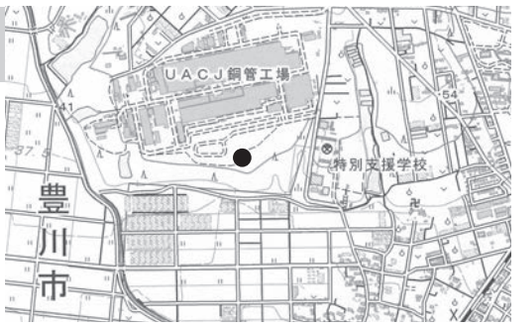
今回のトレンチ調査によって中央の沢西側の茶畑付近以外の地区では、町道による造成および宅地造成、さらに土石流などによる沢の形成により、地形の改変が進み、遺物を含む包含層が削平されている。一方、包含層が認められたTT10・12・13の３ヶ所を中心に暗褐色シルト層および黒褐色砂質シルト層が堆積し縄文時代の石器・土器が出土し、縄文時代の包含層の存在が推定できる。（永井宏幸）



大空前遺跡トレンチ配置図（S=1/1,500）

花ノ木（はなのき）古墳群（本発掘調査A）

所在地 豊川市大木町地内
（北緯34度51分32秒　東経137度24分41秒）
調査理由 道路改良工事（一般国道151号一宮BP）
調査期間 令和元年5月～6月
調査面積 60㎡
担当者 樋上 昇・早野浩二



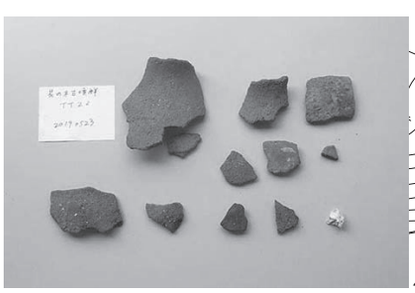
調査地点（1/2.5万「新城」）

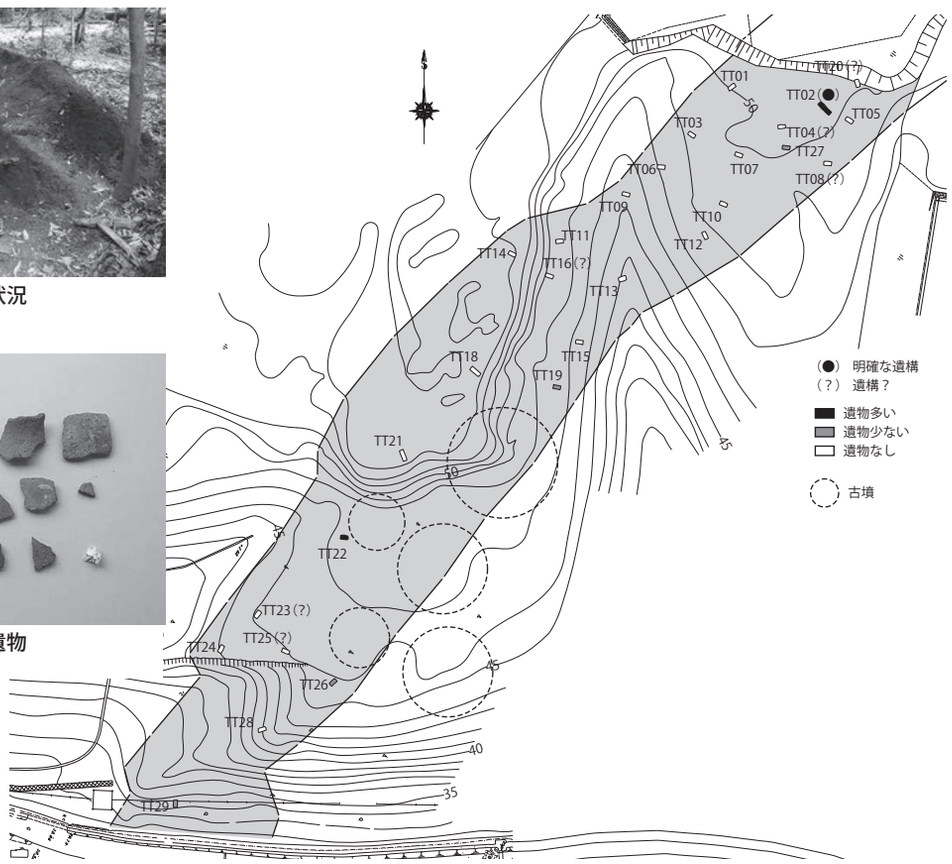
調査の経過　発掘調査は道路改良工事（一般国道151号一宮バイパス）に伴う事前調査として、愛知県建設局道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。

調査の概要　花ノ木古墳群は西原台地の縁辺に立地する。現況は雑木林である。古墳が分布する谷西側の南向き緩斜面については、TT22において弥生時代中期から後期の遺物のまとまった出土が確認されるが、TT19・TT26において遺物量は少なくなる。谷周辺、TT14・TT15以東、TT07以西については、遺構・遺物の出土は確認されない。

周知の遺跡の範囲外であった谷東側の南西向きの緩斜面については、TT02において、弥生時代中期から後期の確実な遺構とまとまった遺物の出土が確認され、少量ながら、TT27においても弥生土器の出土が確認された。この結果、TT07以東に弥生時代の遺跡が展開することが判明した。（早野浩二）


TT02確認状況


TT22出土遺物



花ノ木古墳群トレンチ配置図（1:2,000）

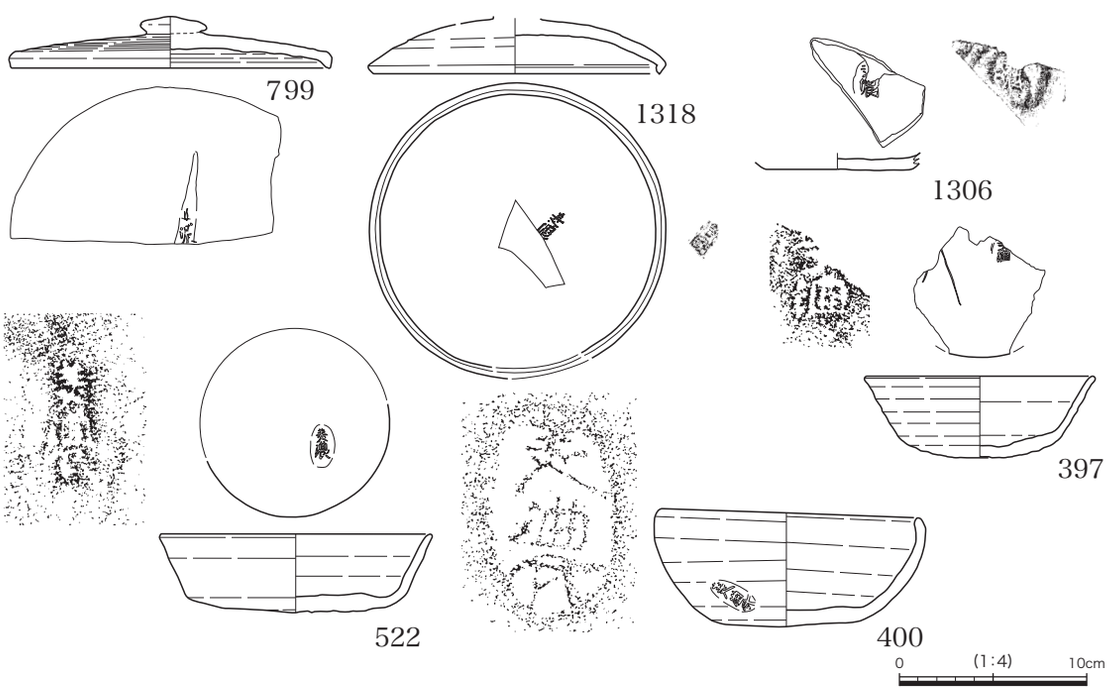
III. 刊行報告書抄録

第209集 北丹波・東流遺跡

北丹波・東流遺跡は標高4～5m前後の沖積低地に立地する。遺跡の北西２㎞圏内、尾張大國霊神社近辺に古代尾張国の国府域が推定されている。また、遺跡の北東1㎞圏内に中世尾張守護所の一つ下津城跡が位置する。さらに、遺跡の東側に隣接して清須と岐阜を南北に結ぶ岐阜街道、2㎞南下した地点で分岐する西方へ延びる美濃街道は近世の主要街道として知られている。

これら３点に関わる成果が今回の調査によって明らかになった。まず、尾張国府域に関連する成果については、８世紀前葉を中心とする遺構と遺物がまとまって確認できたことがあげられる。国府の成立期に関わる資料として「美濃」施印須恵器が６点出土したことは、今回の調査におけるもっとも注目できる成果であろう。「美濃」施印須恵器については、生産が極めて限定的であったことと『続日本紀』に登場する国司笠朝臣麻呂との関係性が指摘されている。加えて、10数点におよぶ漆付着須恵器、製塩土器と畿内系土師器の大量出土は国府域の一角あるいは官衙関連の遺跡を想定させる。つぎに、岐阜街道に関連して、岐阜街道の前身として東海道と東山道を結ぶバイパス「東山道尾張路」を想定する見解がある。だとすると、本遺跡は尾張路の西に隣接する地区にあたり、駅家に関連する遺跡の可能性も指摘される。過去に隣接する地点で陶馬が採集されており、駅家の傍証といえよう。最後に、遺跡の北方に隣接する12世紀初頭の寺院関連と指摘されている下津北山遺跡がある。下津北山遺跡のように一辺50mにおよぶ大区画に比定できる溝かは別として、北丹波・東流遺跡は幅２ｍ前後、深さ１ｍ以上を測る大溝が各所で確認されている。高台付き皿の脚部、白磁の壺底部、方形陶硯など下津北山遺跡と共通する資料群は、一般集落跡と一線を画する評価に値する。

これら古代から中世の成果とは別に、古墳時代前期の水田、畑地を伴う生産遺跡が下層に存在する。幅１～２ｍ前後、深さ１ｍを超える溝が南北方向を中心に確認された。土塁状の高まりを挟んで２条の溝が平行する地点もあり、基幹水路の可能性を指摘した。廻間Ⅲ式を中心とする時期に相当し、尾張平野の大規模水田開発の時期である。（永井宏幸）



北丹波・東流遺跡出土「美濃」施印須恵器

報告書抄録

ふりがな	きたたんば ・ ひがしながれ
書名	北丹波・東流遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第209集
編著者名	永井宏幸、鬼頭 剛、古澤 明、株式会社パレオラボ
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161
発行年	西暦2020年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きたたんば・ ひがしながれ 北丹波・東流	あいちけんいなざわし 愛知県稲沢市 おりずたんげちょう・ 下津丹下町・ おりずもりまち・おりずしたまちにし 下津森町・下津下町西	23220	090016	35度 15分 06秒	136度 49分 39秒	2012.10.～ 2018.8.	4,830㎡	街路改良工事(都)名古屋岐阜線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北丹波・東流遺跡	集落・田畑	古墳時代	溝・水田・畑	土師器	
	集落・官衙	飛鳥～奈良時代	竪穴建物・溝・土坑・流路	須恵器・土師器	「美濃」施印須恵器 人名刻書土器 漆付着須恵器 製塩土器・畿内系土師器
	集落	鎌倉～室町時代	掘立柱建物・溝・井戸	中世陶器・中国磁器・土師器	白磁壺類壺類 墨書土器

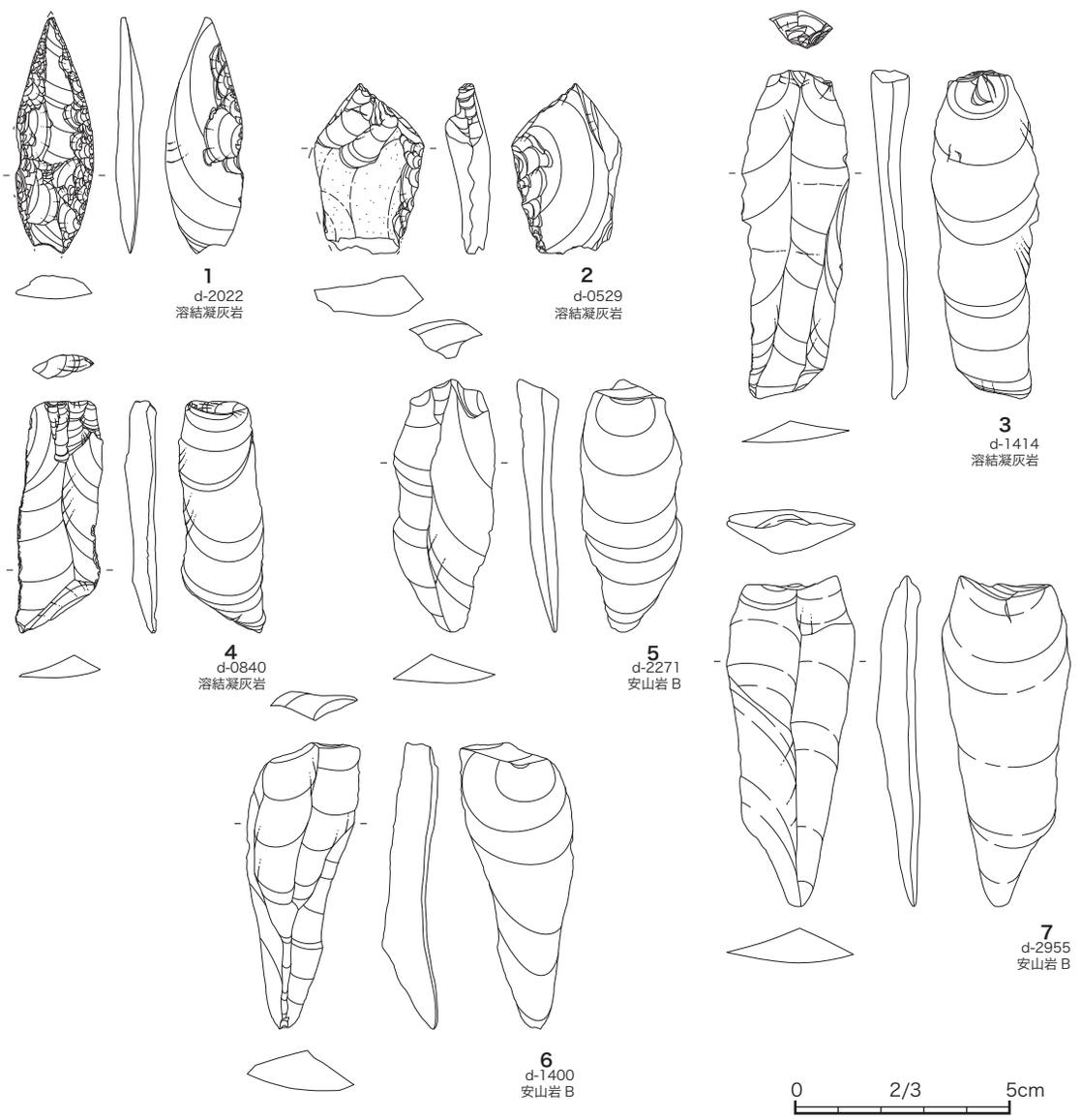
文書番号	発掘届出 (24埋セ第75号・2012.9.5、25埋セ第88号・2013.10.9、26埋セ第142号・2015.3.19、28埋セ第131号・2017.3.31、30埋セ第1号・2018.4.4)
	通知 (24教生第1615号・2012.10.3、25教生第2014号・2013.10.24、27教生第19号・2015.4.7、29教生第178号・2017.4.17、30教生第184号・2018.4.16)
	終了届・保管証・発見届 (24埋セ第133号・2013.3.22、25埋セ第138号・2014.2.24、27埋セ第36号・2015.7.7、29埋セ第37号・2017.7.3、30埋セ第66号・2018.9.7)
	監査結果通知 (25教生第161号・2013.4.16、25教生第3180号・2014.3.11、27教生第1110号・2015.7.24、29教生第1347号・2017.7.13、30教生第2161号・2018.9.21)

要約

発掘調査は3つの時期にわたる成果を得た。古墳時代前期を中心とする時期は、水田と畑地をともなう生産遺跡である。なかでも水路とした数条の大溝は南北方向を中心に遺跡を縦断する農業用の基幹水路を想定した。奈良時代初頭を中心とする時期は、溝と竪穴建物などとともに大量の遺物が出土した。特に、6点出土した「美濃」施印須恵器は、生産遺跡以外の1遺跡の出土点数としては特筆すべき事例となった。「美濃」施印須恵器は、生産地および生産時期が極めて限定的であったことから『続日本紀』に登場する国司笠朝臣麻呂との関係性が指摘されている。また、漆付着須恵器、製塩土器、畿内系土師器などがまとまって出土していることからも、北丹波・東流遺跡は尾張国府域の一角、あるいは官衙関連施設の可能性が高い。平安時代末期から鎌倉時代初頭の時期は、北方に隣接する下津北山遺跡との関係性が指摘できる。高台付皿の脚部、白磁の壺底部、方形陶硯など共通する資料群が一般集落と一線を画する。

第213集 川向東貝津遺跡

奥三河山間部の境川左岸段丘上に立地する後期旧石器時代から縄文時代の集落跡。後期石器時代は尖頭器文化期と細石器文化期の２時期に分けられ、それぞれ石器集中地点が認められる。また、縄文時代中期には４棟、後期には２棟の竪穴建物跡が確認されている。 （樋上　昇）



後期旧石器時代尖頭器文化期の石器

報告書抄録

ふりがな	かわむきひがしがいついせき
書　　名	川向東貝津遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 213 集
編著者名	樋上　昇・堀木真美子・鬼頭　剛・川添和暁・鈴木恵介・田中　良
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かわむきひがしがいつ 川向東貝津	あいちけんきたしたらぐん 愛知県北設楽郡 したらちょうかわむき 設楽町川向	23561	700348	35 度 06 分 26 秒	137 度 33 分 54 秒	2010.11 〜 2010.11 2015.5 〜 2015.11 2016.5 〜 2016.9	3,950	設楽ダム工事関連事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川向東貝津遺跡	集落跡	後期旧石器時代 〜 縄文時代草創期	石器集中地点	尖頭器、彫器、 細石刃、細石核	後期旧石器時代で 2 時期の文化期
	集落跡	縄文時代中期	竪穴建物 4 棟、 土坑	縄文土器、石器	石囲炉を有する 遺存状態良好な 竪穴建物
	集落跡	縄文時代後期	竪穴建物 2 棟、 土坑	縄文土器、石器	

文書番号	発掘届出 : 埋文（22 埋セ第 168 号 /27 埋セ第 15 号 /28 埋セ第 1 号） 発掘届出：県教委（22 教生第 1677 号 /27 教生第 411 号 /28 教生第 169 号） 完了報告（22 埋セ第 226 号 /27 埋セ第 88 号 /27 埋セ第 62 号） 文化財認定（27 教生第 2187 号 /28 教生第 2178 号）

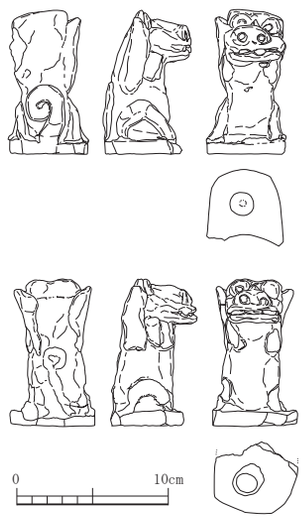
要　　約	奥三河山間部の境川左岸段丘上に立地する後期旧石器時代から縄文時代の集落跡。後期旧石器時代は尖頭器文化期と細石器文化期の 2 時期に分けられ、それぞれ石器集中地点が認められる。 また、縄文時代中期には 4 棟、後期には 2 棟の竪穴建物跡が確認されている。

第214集 北山窯跡 勘介窯跡

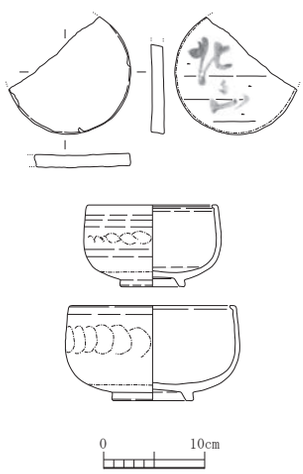
北山窯跡と勘介窯跡は瀬戸市落合町に所在する窯跡である。発掘調査は、平成27年度と29年度に公益財団法人瀬戸市文化振興財団と当センターにより行われた。遺物の整理作業等は当センターで進め、先に刊行されていた概要報告書の成果と併せて報告書を作成した。

勘介窯の操業期間は16世紀初頭から中葉（大窯第１段階後半～第3段階前半）であり、確認された2基の窯体（大窯）では第1号窯から第2号窯の順の遷移が明らかとなった。北山窯跡は勘介窯の物原等の上に築かれた近代以降の連房式登窯であり、本格的な発掘調査が行われた貴重な事例となった。聞き取り調査では明治35年に創業し、昭和31年が薪を燃料とした最後の窯焚きであったという。　（武部真木）





勘介窯跡（大窯,戦国期）の出土陶器





北山窯跡（連房式登窯,近・現代）出土の陶磁器

報告書抄録

ふりがな	ほくざんかまあと　かんすけかまあと
書　　名	北山窯跡　勘介窯跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第214集
編著者名	武部真木(編)・松澤和人(瀬戸市文化振興財団)・藤根 久,米田恭子(パレオ・ラボ)
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2020年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほくざんかまあと 北山窯跡 かんすけかまあと 勘介窯跡	あいちけん　せとし 愛知県瀬戸市 おちあいちょう 落合町	23204	030970 030408	35度 15分 07秒	137度 07分 35秒	2015.08.～09 2015.10. ～2016.03 2017.05	290	急傾斜地 崩壊対策 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北山窯跡	窯跡	近代・現代	窯体(連房式登窯1基) 物原	磁器(碗,湯呑,皿類) ・陶器(植木鉢,鉢類) ・窯道具	近代連房式登窯の 貴重な調査事例 (北山窯跡)
勘介窯跡	窯跡	戦国	窯体(大窯２基) 物原	大窯製品(天目茶碗, 皿類,擂鉢,筒形容器ほか) ・窯道具	落合城跡(中世城館) 推定地に近い窯跡 (勘介窯跡)

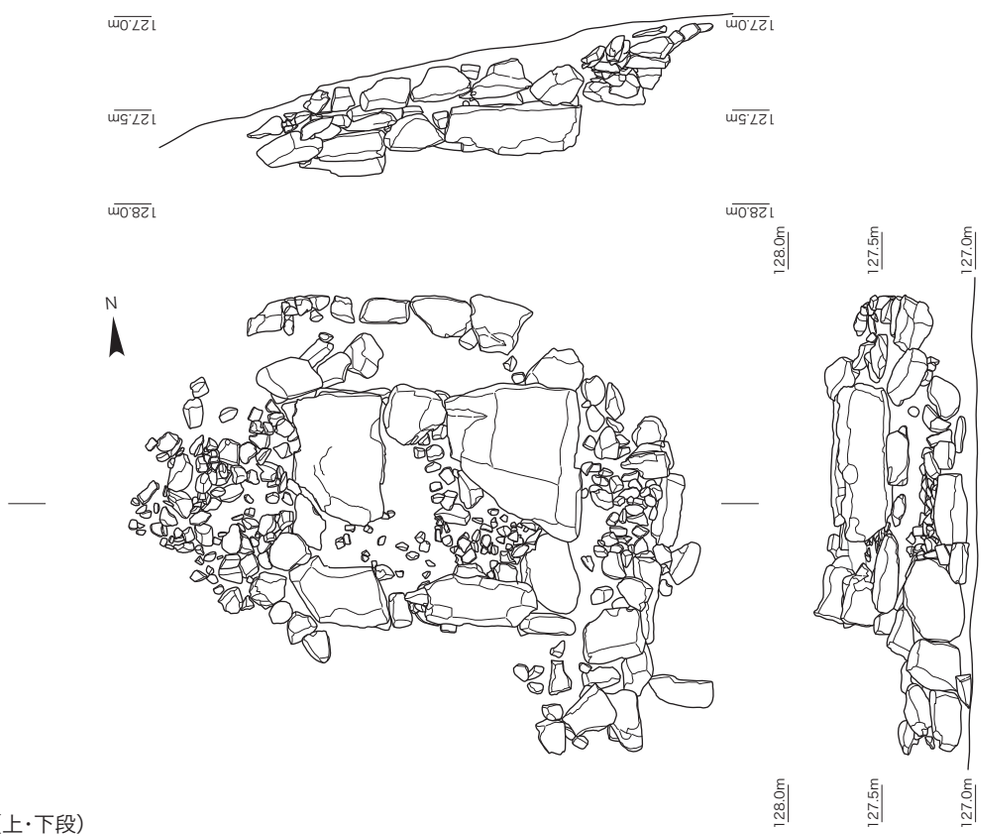
文書番号	発掘届出 （27瀬文振第1050-8号,2015.7.1/29埋セ第5号,2017.4.7） 通知（27教生第1231号,2015.7.1/29教生第250号,2012.4.18） 終了届・保管証・発見届 （27瀬文振第1050-17号・27瀬文振第1050-18号・27瀬文振第1050-19号,2018.3.11 /29埋セ第22号,2017.5.31） 鑑定結果通知 （27教生第3287号・27瀬文第698号,2016.3.31/29教生第955号,2017.6.14）

要約	勘介窯跡は、瀬戸市北部の水野川右岸丘陵地に位置し、標高175m前後の南斜面に立地する戦国期の窯跡である。調査により2基の大窯の窯体の一部と、これに伴う灰原を確認した。それぞれの操業期間には時期差がみられ、勘介1号窯は大窯第1段階後半から第2段階前半（16世紀初頭から前葉）、勘介2号窯は大窯第2段階後半から第3段階前半（16世紀中葉）を主体とする時期と考えられる。 北山窯跡は創業が明治に遡ると伝えられる近・現代の連房式登窯である。常滑窯産土管を利用した煙道部など、最終段階の構造の一端が明らかとなった。連綿と続いてきた窯業地ではむしろ希少な資料であり、百年ほどの昔の事柄はすでに不明瞭となっている部分も少なくない。

第216集 普門寺旧境内

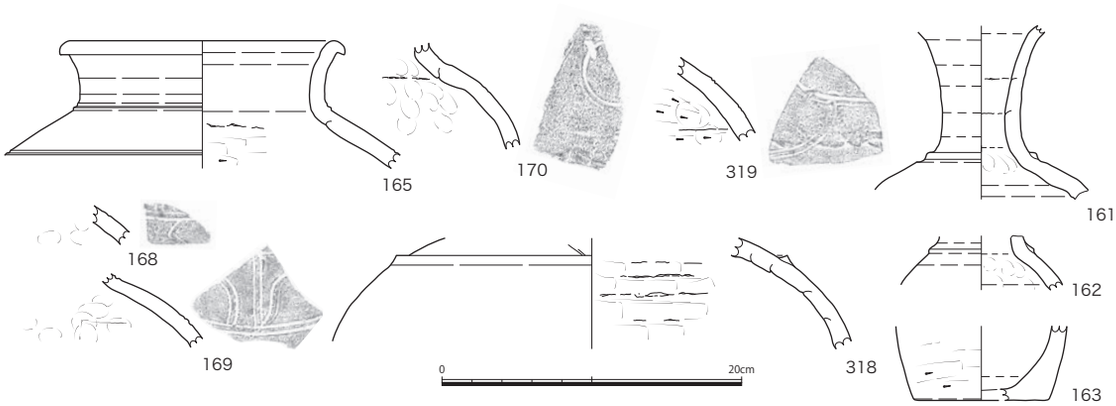
普門寺旧境内は中世前期を主体とする山寺遺構で、愛知大学による分布調査、豊橋市教育委員会による測量調査・分布調査、発掘調査の結果、２つの本堂跡とそれに付随する多数の平場群、さらにその周囲の巨岩、中世墓群、経塚によって構成されることが判明している。

山麓付近の平場に重複する17Ａ区の発掘調査においては、戦国時代以降の断続的な平場の利用を確認した。丘陵斜面下位の平場群に重複する17B区の発掘調査においては、中世前期と中世末から戦国時代における平場の利用、近世における墓と思われる石積みの構築を確認した。平場群間の沢の立会調査においても、中世前期を主体とする遺物が大量に出土した。（早野浩二）



（上・下段）

石積み008SZ



出土した渥美窯製品

報告書抄録

ふりがな	ふもんじきゅうけいだい
書　　名	普門寺旧境内
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第216集
編著者名	早野浩二・鬼頭　剛
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2020年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふもんじきゅうけいだい 普門寺旧境内	あいちけん　とよはしし 愛知県豊橋市 うのやちょうあざ　やました 雲谷町字ナベ山下 7ほか	23201	790481	34度 44分 40秒	137度 28分 10秒	2017.05.01～ 2017.12.27	300	予防治山事業・小規模治山事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
普門寺旧境内	寺院跡	平安時代 鎌倉時代 室町時代 戦国時代 江戸時代	平場 平場 平場 平場 平場、通路状遺構、遺物集積、土坑、石積み	灰釉陶器、山茶碗 山茶碗、渥美窯製品、常滑窯製品、瀬戸・美濃窯製品、初山窯製品、中国陶磁、土師器、瓦、銭貨、金属製品、石硯	普門寺旧境内は、中世前期を主体とする山寺遺構である。2つの本堂跡を中心として展開する250か所程度の平場群の一部と山麓付近の平場の一部を発掘調査した。

文書番号	発掘届出（29埋セ第4号・2017.4.5） 通知（29教生第204号・2017.4.17） 終了届・保管証・発見届（29埋セ第106号・2018.1.5） 鑑定結果通知（1豊教美第458号・2019.12.19）

要約

普門寺旧境内は中世前期を主体とする山寺遺構で、愛知大学による分布調査、豊橋市教育委員会による測量調査・分布調査、発掘調査の結果、２つの本堂跡とそれに付随する多数の平場群、さらにその周囲の巨岩、中世墓群、経塚によって構成されることが判明している。

山麓付近の平場に重複する 17Ａ区の発掘調査においては、戦国時代以降の断続的な平場の利用を確認した。丘陵斜面下位の平場群に重複する 17B 区の発掘調査においては、中世前期と中世末から戦国時代における平場の利用、近世における墓と思われる石積みの構築を確認した。平場群間の沢の立会調査においても、中世前期を主体とする遺物が大量に出土した。

IV. 普及・公開活動の記録

埋蔵文化財展

愛知県埋蔵文化財センターでは、遺跡の発掘調査により発見された資料を広く公開するとともに、歴史講座や体験プログラムなどの企画を通じて、県民の埋蔵文化財に対する理解を深め、文化財保護意識の向上を図ることを目的とした埋蔵文化財展を行っている。

2019年度は、春に愛知県埋蔵文化財調査センターと共催し新出土品展と重要文化財の特別公開を行った。また、秋には名古屋市博物館と中日新聞社などと共催して名古屋市博物館で特別展「発掘された日本列島２０１９」展の地域展として「尾張の城と城下町　三英傑の城づくり・町づくり」を開催した。

春の埋蔵文化財展

1 会場：愛知県埋蔵文化財調査センター

2 会期：平成31年4月3日（水）～4月14日（日）

3 開催趣旨：「やとみ新発見展（しんはっけんでん）！」と題して昨年度の発掘調査成果を中心に展示し、展示解説を実施。入館無料。

4 内容

「やとみ新発見展！2019」２階収蔵庫Cにて

2019年度に本発掘調査Bを実施した７遺跡（北丹波・東流遺跡、一色青海遺跡、清洲城下町遺跡、牛寺遺跡、下懸遺跡、滝瀬遺跡、石原遺跡）および整理作業を実施した川向東貝津遺跡の出土遺物と写真パネルなどを展示。

「食と文化の考古学　煮炊きの道具の歴史」

２階収蔵庫Cにて展示

「食と文化の考古学　石の道具の歴史」

２階資料管理閲覧室にて展示。

配布資料として埋文展ニュース「埋文桜ニュース2019」を発行し、遺跡の概要説明と本年度イベント案内および愛知県埋蔵文化財調査センター春の特別公開の展示解説を掲載。

5 考古学縁日

平成31年4月13日（土）と4月14日（日）に弥富市社会教育センター（弥富市主催）で開催された「やとみ春まつり」に合わせて実施し、さまざまなワークショップを行った。

ツボ釣り（やとみ春まつり会場テントブース）参加者1021名（２日間）

キネクトゲーム（愛知県埋蔵文化財調査センター２階）参加者300名（２日間）

6 その他

期間中、愛知県埋蔵文化財調査センターは春の特別公開と題して国重要文化財の朝日遺跡出土品から４点の土器を展示した。また、考古学縁日当日は「輪投げ」と「火起こしマスター」を実施した

7 入館者数：1036名

（うち4月13日は347名、4月14日は276名）



▲春の埋文展　チラシ



▲「埋文桜ニュース」

秋の埋蔵文化財展

1　展示名称

特別展「発掘された日本列島２０１９」展の地域展「尾張の城と城下町　三英傑の城づくり・町づくり」

2　会場：名古屋市博物館　部門展示室

3　会期

令和元年11月16日（土）～12月28日（土）

休館日：毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）、第４火曜日

開館時間：９時３０分～１７時（入場は１６時３０分まで）

4　主催

文化庁・名古屋市博物館・中日新聞社・全国新聞社事業協議会・愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会・公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

5　内容

尾張地域における中近世城館の発掘調査成果から、築城やインフラ整備などの「土木事業」に焦点を当て、信長・秀吉・家康という「三英傑」ゆかりの城の変遷を通して、戦国時代から江戸時代への流れをダイナミックにたどる。主な内容構成は次のとおり。

序章 中世の那古野

第１章 新しい時代の始まり

（織田信長の城づくり・町づくり）

第２章 東日本最大級の都市

（豊臣秀吉の城づくり・町づくり）

第３章 究極の城と城下町

（徳川家康の城づくり・町づくり）

愛知県埋蔵文化財調査センターをはじめ名古屋市博物館、名古屋市教育委員会、名古屋城総合事務所、名古屋市蓬左文庫、清須市教育委員会、小牧市教育委員会が所蔵する資料79種591点を展示し、写真パネルと解説パネルを掲示した。

6　ガイドブック

Ｂ５判８０頁カラー印刷

7　関連事業

地域展に関連する事業として連続講座４回を実施した。（１階展示説明室）

第1回11月24日（日）午後1時30分～2時30分「織田信長の城づくり・町づくり（小牧山城とその城下町）」鈴木正貴--- 参加者132名

第２回12月14日（土）午後1時30分～2時30分「豊臣秀吉の城づくり・町づくり（清須城とその城下町）」鈴木正貴--- 参加者134名

第3回12月15日（日）午後1時30分～2時30分「徳川家康の城づくり（名古屋城とその武家屋敷）」鈴木正貴--- 参加者103名

第4回12月22日（土）午後1時30分～2時30分「徳川家康の町づくり（名古屋城下町）」岡村弘子 --- 参加者114名

8　入館者数：8938名（35日間）

なお、ガイドブック販売数は711部である。



▲ガイドブック表紙



▲秋の埋文展　広告チラシ

春の埋蔵文化財展



▲会場施設入り口



▲やとみ春まつり会場での展示



▲キネクトゲーム



▲やとみ新発見展 展示室

秋の埋蔵文化財展



▲名古屋市博物館 展示室入り口



▲開会式



▲展示状況（序章 那古野城の遺物）



▲展示状況（第2章 後期清須城の瓦）



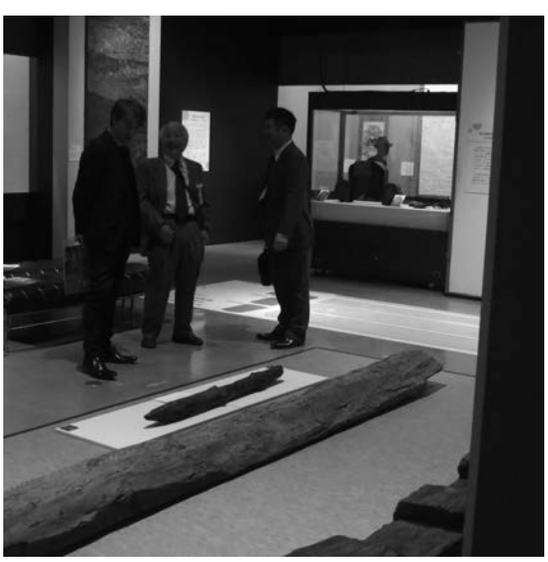
▲名古屋市博物館 展示会場のようす



▲展示状況（第2章 清須城石垣土台木）



▲内覧会のようす



▲展示解説

第8回 考古学セミナー「あいちの考古学2019」

概要：　考古学セミナー「あいちの考古学」は、愛知県内および近隣地域で活動する県・市町村教育委員会、公益財団法人、大学、特定非営利活動法人（NPO）、研究グループ、関連企業などが一堂に会して遺跡調査と考古学に関係する研究成果を広く一般に公開し情報を共有することを目的に、平成24年度より開催している。名古屋市博物館が会場となって6年目となる。

今回は、同時に名古屋市博物館において開催されていた「発掘された日本列島2019」展と「尾張の城と城下町－三英傑の城づくり・町づくり」地域展に合わせて、12月8日（日）の午後にシンポジウム「城下町を彩った金・銀・銅」を開催した。継続して参加されている方だけでなく、初めて参加された方も多数あった。

主　催：名古屋市博物館・愛知県埋蔵文化財センター
日　時：12月７日（土）13時～16時30分
　　12月８日（日）10時～16時
会　場：名古屋市博物館　講堂・展示説明室
参加者数：12月7日（土）197名、12月8日（日）169名　合計366名
出展団体・個人：プレゼンテーション9、ポスターセッション16（エントリー制）
講　演：杳名貴彦（独立行政法人国立科学博物館理工学研究部研究主幹）
事例報告・パネルディスカッション：
　熊崎 司（津市教育委員会）、井川祥子（岐阜市教育委員会）、
　鈴木正貴、堀木真美子、蔭山誠一（愛知県埋蔵文化財センター）

◎12月7日（土）13時～16時30分（12時30分開場）
13:00～13:10　開会あいさつ
＜プレゼンテーション＞
13:10～13:30「愛知県の古代寺院における造営尺度の推定」河嶋優輝（愛知県埋蔵文化財センター）
13:30～13:50「横穴墓群にみられる階層構造の分析－静岡県域を対象として－」
　林　順（名古屋大学人文学研究科博士前期課程）
13:50～14:10「古代のやきもの産地　猿投窯の施釉陶器－日光男体山の信仰と施釉陶器－」
　立原遼平（青山学院大学大学院文学研究科）
14:10～14:25　◆宣伝タイム
14:25～14:50　◆休憩
14:50～15:10「愛知県新城市萩平遺跡A地点隣接地第7次調査の成果」徳永 司・長井謙治（愛知学院大学）
15:10～15:30「古城山窯跡第3次調査報告」下田大真（愛知学院大学）
15:30～15:50「雲錦手の研究－幹・葉・花の図像典拠に関する考察－」青木 修・宮川菜々子・佐久間真子・井上あゆこ・中野耕司・鈴木智恵・安藤 悟（犬山焼ミュージアム）
15:50～16:00　◆２日目の案内と関連展示の案内

◎12月8日（日）10時～16時（9時30分開場）
10:00～10:05　2日目日程・連絡
＜プレゼンテーション＞

10:10～10:30「兄弟を探して－清洲城下町出土瓦編－」白樫 淳（株式会社 アコード）
10:30～10:50「久留倍官衙遺跡公園について」大原涼子（四日市市教育委員会）
10:50～11:10「岐阜県関市古町遺跡(関鍛治発祥の地)発掘調査成果」伊藤 聡（関市文化財保護センター）
11:10～11:20　◆宣伝タイム
11:20～12:30　◆昼休憩

シンポジウム「城下町を彩った金・銀・銅」
12:30～12:40　趣旨説明　「城下町を彩った金・銀・銅　シンポジウムについて」
　　蔭山誠一（愛知県埋蔵文化財センター）
＜講演＞
12:40～13:40「城下町を彩った金・銀・銅」
　　沓名貴彦（独立行政法人国立科学博物館理工学研究部研究主幹）
＜事例報告＞
13:40～14:00　事例報告1「多気北畠氏遺跡」熊崎 司（津市教育委員会）
14:00～14:20　事例報告2「鷺山遺跡群ー福光城下町の銅細工工房ー」井川祥子（岐阜市教育委員会）
14:20～14:40　事例報告3「清洲城下町遺跡」
　　鈴木正貴・堀木真美子・蔭山誠一（愛知県埋蔵文化財センター）
14:40～15:30　パネルディスカッション
　　（パネラー 沓名貴彦・熊崎 司・井川祥子・鈴木正貴・堀木真美子、司会 蔭山誠一）
15:30　閉会あいさつ

＜ポスターセッション＞
（1）「設楽ダム事業に伴う発掘調査2019」愛知県埋蔵文化財センター
（2）「雲錦手－春秋を彩る犬山焼－」青木 修・宮川菜々子・佐久間真子・井上あゆこ・中野耕司・鈴木智恵・安藤 悟・藤田沙樹（犬山焼ミュージアム）
（3）「古代のやきもの産地・猿投窯の施釉陶器－白瓷生産の拡散と猿投窯系工人の動向を考える－」
　　青木 修・大西 遼・立原遼平・中里信之（東海窯業史研究会）
（4）「久留倍官衙遺跡公園について」大原涼子（四日市市教育委員会）
（5）「兄弟を探して－清洲城下町出土瓦編－」白樫 淳（株式会社 アコード）
（6）「2019年度 東海市畑間・東畑遺跡の発掘調査について」早川由香里（東海市教育委員会）
（7）「『新編 西尾市史 資料編1 考古』」西尾市教育委員会 市史編さん室
（8）「名古屋市内の民間発掘調査事例の紹介」株式会社 イビソク 文化財コンサルタント事業部
（9）「熊野高見遺跡・熊野水田遺跡」銅坂有紗（春日井市教育委員会）
(10)「学校における考古資料の活用」大塚友恵（NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク）
(11)「史跡本證寺境内発掘調査成果」植田美郷（安城市教育委員会）
(12)「文化財を用いた情報発信の一事例」西村誠治・植木 萌（ナカシャクリエイテブ株式会社）
(13)「遺跡から出た何だコレ！？－科学分析で材質を探る－」竹原弘展（株式会社 パレオ・ラボ）
(14)「土器で塩を作ってみた！」吉田真由美（鈴鹿市考古博物館）
(15)「2019年度 豊田市伊保古瓦出土地（伊保白鳳寺）の発掘調査」
　　島田莉菜・方 美樺（名古屋大学大学院人文学研究科）
(16)「考古学フォーラムのご案内」考古学フォーラム

＜＜考古学セミナー アンケート結果より＞＞

12月7日（土）と12月8日（日）に、プレゼンテーション・シンポジウムの会場であった講堂の受付にて、考古学セミナーのアンケートを行った。両日で105名の方からアンケートを回収した（表を参照）。

アンケート内容		12/7（土）	12/8（日）
参加者数		197名	169名
回答数		45（22.8%）	60（35.5%）
1.今日はどちらからお越しですか？	a.名古屋市内	26	35
	b.愛知県内（名古屋市外）	17	19
	c.愛知県外	2	6
2.このイベントは何を見てお知りになりましたか？？	a.博物館に来場して	8	7
	b.ホームページ	9	12
	c.考古学セミナーチラシ	12	23
	d.知人から	6	3
	e.発掘された日本列島2019チラシ	15	22
	f.その他	6	1
3.あなたの性別を教えてください	a.男性	36	43
	b.女性	8	16
4.あなたの年齢を教えてください	a.中学生以下	1	1
	b.高校生	0	1
	c.大学生	5	0
	d.一般	40	59
5.このイベントへの参加は今回で何度目ですか？	a.初めて	18	23
	b.2回目	8	10
	c.3回目	6	11
	d.4回目以上	13	16
6.今年のセミナーで特に面白かった内容はどれですか？	a.プレゼンテーション	24	14
	b.ポスターセッション	7	9
	c.宣伝タイム	2	3
			43

またアンケートの質問７でシンポジウムの感想と要望を質問８で今後の参加したいイベントや活動について多くの回答を得た。

シンポジウムに対する感想と要望では、講演を聴講しての感激の他、列島展との共催は良かった、古い発掘調査を再調査しより詳細な情報を把握しようという発表、盛りだくさんの内容・最新情報を知れたこと、遺跡から出土する金属製品について歴史と理化学の両分野からもたくさんの情報を得ることができること、多角的な城下町の各拠点について共通点と差異が明らかになること、発掘されたものから金・銀・銅について知ることができること、地元の鷲山の遺跡について知ることができたことなどについて良い感想をいただいた。一方で、基調講演はもう少し時間をかけて聞きたかった、休憩を途中に入れてほしかった、質問時間が欲しかった、専門用語が多く出されて初学の者には難しいという意見をいただいた。今後、シンポジウムの時間配分や一般の参加者への説明資料の配布などの改善をしていきたい。

今後の参加したいイベントや活動については、旧石器時代から中世・戦国時代にかけての各時代の発掘調査の成果や各時代に関連した講座、石器や土器・陶器作りなど体験型のイベント、子供向けのワークショップ、テーマとして縄文～古墳時代の日本を含めた東アジアの「墓制」、邪馬台国と狗奴國、中世の土器・陶磁器の暦年代、中世から戦国時代の城郭などのシンポジウムのような研究発表などの意見をいただいた。



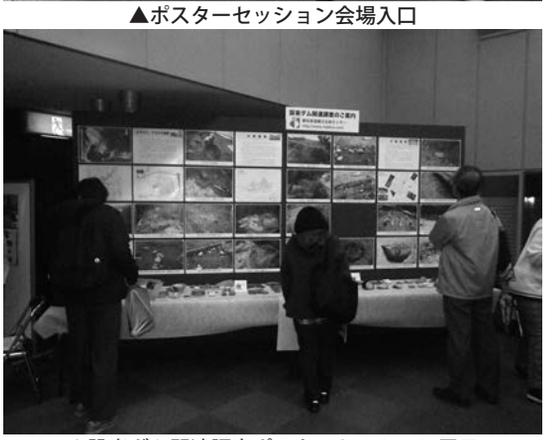
▲プレゼンテーション講堂受付



▲ポスターセッション会場入口



▲宣伝タイム（犬山焼ミュージアム）



▲設楽ダム関連調査ポスターセッション展示



▲宣伝タイム（発掘された日本列島2019）



▲ポスターセッション展示会場風景



▲シンポジウム沓名貴彦氏の講演



▲シンポジウムパネルディスカッション

考古学体験とバックヤードツアー

場所：愛知県埋蔵文化財調査センター
日時：８月１日（木）　10時から12時／午後１時から３時
対象：小・中学生とその保護者
参加人数：24名

今年度実施した考古学体験とバックヤードツアーは、小・中学生とその保護者を対象として夏休み期間中に合わせて実施した。

バックヤードツアーは「バックヤードツアーで肝だめし！！」として、特別収蔵庫に順路を設定し、順路上には各遺跡から出土した獣骨や人骨、木製卒塔婆を配置した。バックヤードツアーには肝だめし的な趣向やクイズラリー的な要素を凝らしたことが奏功し、参加者の悲鳴や歓声が多く聞かれた。終了後は、改めて収蔵庫を案内して、特別収蔵庫の役割、各遺物について担当者が解説した。

考古学体験は「縄文人が使った石を調べよう！！」として、遺物整理室で滝瀬遺跡（設楽町）の集石遺構で一括して取り上げた礫を用いて、実際に石材を分類する作業を20分から30分程度で体験した。参加者は石材の分類から分類後の収納までの一連の作業を体験し、その際、用意したワークシートに石材の種類と特徴を各自で記入してもらい、それを持ち帰るようにした。

今回の企画は対象とした小・中学生関心からの関心が高く、考古学の体験も含めて楽しく参加して頂いたようであった。


▲縄文人が使った石を調べよう！


▲縄文時代の石器を用いた考古学体験

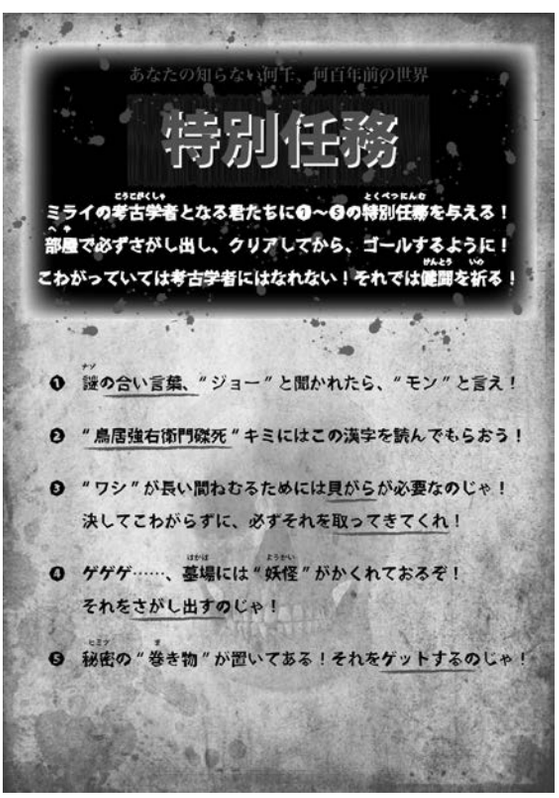

▲収蔵庫内をめぐる肝試し！

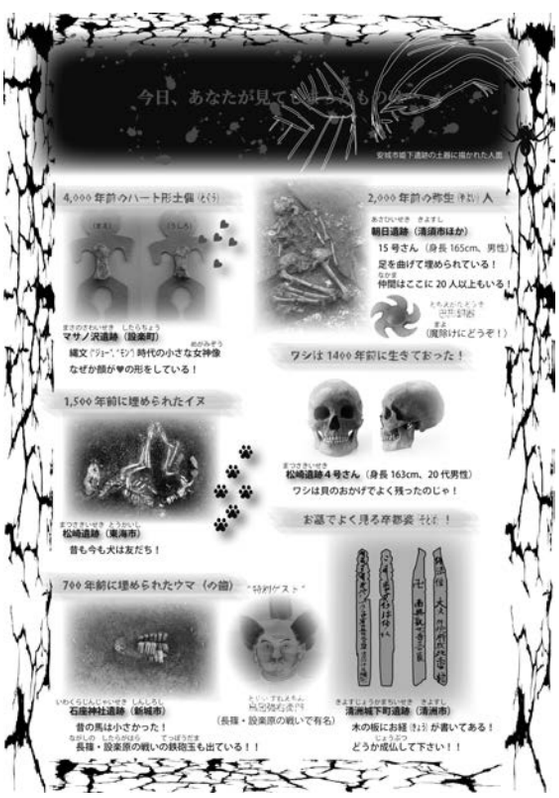

▲肝試し的に配置した収蔵資料





◀考古学体験　ワークシート▲





▲バックヤードツアー　ワークシート

連続歴史講座・埋文市民大学 「石の考古学」

目的：当センターの調査研究員が一般市民向けに、共通したテーマで研究成果を発表するとともに、体験を通じて考古学の研究方法を学んでもらう。
場所：愛知県埋蔵文化財調査センター　2階　研修室および1階　1次整理室
時間：連続歴史講座は午前10時30分より、埋文市民大学は午後1時30分より開催。参加費は無料。

連続歴史講座『石の考古学』

	日 程	タイトル	講 師	参加者数
第1回	9月14日	考古遺物と岩石学	堀木真美子	29名
第2回	9月28日	石器の形態から見る石器時代史	田中　良	27名
第3回	10月26日	中近世の石造物	池本正明	15名
第4回	11月16日	弥生時代 磨製石斧のライフサイクル	蔭山誠一	13名

埋文市民大学『石の考古学』

	日 程	タイトル	講 師	参加者数
第1回	9月14日	考古遺物と岩石学	堀木真美子	10名
第2回	11月16日	石を磨こう！	蔭山誠一	9名



市民大学（資料の観察）



歴史講座の風景



市民大学（研究発表）



歴史講座の風景



▲連続歴史講座のチラシと配布資料

歴史講座 「発掘された西三河の城 2」

目的：連続歴史講座を弥富市に所在する愛知県埋蔵文化財調査センターで平成26年度より実施しているが、三河地域の方々が参加しやすい様にと考え、昨年度と同様に当センターが所属する公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団の管理施設である「愛知県青年の家」を会場として歴史講座を開催することとした。また岡崎市に所在していることから、岡崎市教育委員会に共催を依頼し、最新の発掘調査の成果報告も行うこととした。

下記の日程・内容での準備が進められていたが、新型コロナウィルス感染症の感染防止対策として、今回の歴史講座の開催は中止となった。
なお、講座資料集は可能な機会に希望者に配布を行い、PDFデータも公開している。

日時：令和2年2月29日(土)　午後1時～4時 (12時30分会場)

場所：愛知県青年の家　第4研修室 (多目的ホール) 岡崎市美合町並松1-2

主催：愛知県埋蔵文化財センター・岡崎市教育委員会

内容：西三河に所在する城のうち、発掘調査が実施された5遺跡の成果報告と出土遺物である「かわらけ」の研究報告を行い、同時に土器やパネル展示を行う。

＜発表＞

能見城跡(豊田市) 蔭山誠一
東端城跡(安城市) 宮腰健司
御船城跡(豊田市) 武部真木
大平本城跡(豊田市) 池本正明
戦国時代のかわらけ　鈴木正貴
岡崎城跡(岡崎市) 山口遥介 (岡崎市教育委員会)



▲資料集表紙



▲会場のパネル展示



▲開催を紹介する新聞記事

おかざきじょうあと
岡崎城跡（総堀）

	調査面積	調査期間
①籠田公園地点（籠田町）	138 ㎡	2018 年 7 月～9 月
②御旗公園地点（材木町）	91 ㎡	2019 年 1 月
③籠田総門地点（康生通）	27 ㎡	2019 年 8 月～9 月

岡崎市教育委員会　山口遥介

「岡崎城跡整備基本計画 - 平成 28 年度改訂版 -」に基づき、岡崎城跡の遺構確認を目的とした発掘調査を継続的に実施しています。平成 30・31 年度は岡崎城総堀跡及び籠田総門跡で発掘調査を行い、総堀の土塁や堀法面などが確認されました。また、近代以降ではありますが、石垣や下水管などが総堀跡を利用してつくられていることなどがわかりました。



城郭重ね図

①籠田公園地点

総堀の東辺にあたります。明治 17 年の地籍図では水路敷きとして総堀の痕跡が残ります。近代になって総堀法面上部に石垣が新たに築かれています。


近代石垣の背後の落ち込み（堀法面）


調査位置図（M17 地籍図に加筆）

おおだいらほんじょうあと
大平本城跡

愛知県豊田市大平町下屋敷

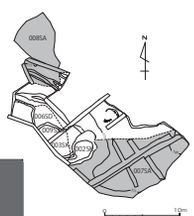
調査面積	調査期間
310 ㎡	2011 年 10 月～11 月

愛知県埋蔵文化財センター　池本正明

大平本城跡は豊田市大平町に所在します。発掘調査は急傾斜地崩壊対策事業に伴うもので、2011（平成 23）年に実施しました。今回の調査区は大平本城跡の南西側の斜面で、標高は 375m、小規模な二段の平坦面とその間の斜面となります。

調査の結果、下段の平坦面は南側が造成（000SX）により拡張され、東西に土塁（007SA・008SA）も検出されました。平坦面の前面と背面は急峻な斜面となり、この平坦面が大平本城跡の南側の曲輪の一つであったと考えられます。出土遺物は 15 世紀後半～16 世紀前半と 18 世紀に区分できます。大平本城跡の継続時期は不明ですが、時期的な断絶もあり、後者は廃城後の再利用に伴うものかもしれません。


◀ 遺跡の遠景
矢印が調査区。
南から臨む。調査区下の道路は県道 19 号線。



主要な遺構

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 201 集『大平本城』（2015）

のうみじょうあと
能見城跡

愛知県豊田市榊野町

調査面積	調査期間
2000 ㎡	1998 年 5 月～9 月

愛知県埋蔵文化財センター　鈴山誠一

能見城跡は豊田市榊野町（旧東加茂郡旭町大字榊野）にある戦国時代の山城です。発掘調査は県道土岐足助線建設に伴う事前調査で、1998（平成 10）年に実施しました。北東方向に突き出した標高 330m の尾根の突端に位置します。尾根の東で谷をさざわ（阿摺川の川面より 50m ほど高い場所にあり、眼下に美濃街道を見下ろすことができます。能見城跡は 15 世紀初頭から末頃に営まれていた城跡で、南北 83m、東西 32m の広さをもちます。発掘調査により検出された遺構として、ゆるく傾いて広がる 3 つの平坦面が確認できました。これらのうち、急勾配の斜面で周りを囲まれたもっとも高いところにある平坦面 1 では、土塁や階段状の遺構が検出されました。出土遺物では 15 世紀後半から末頃の古瀬戸陶器の緑釉小皿、擂鉢、土師器の皿・鍋・釜などの調理具、供膳具が出土しています。城跡の立地から阿摺川をはさんで小渡・美濃方面を意識した美濃街道筋の城跡と推定されます。


◀ 遺跡の遠景
矢印が調査区。
南から臨む。南北にのびる道が美濃街道。
東から西へ阿摺川が流れている。


天目茶碗


擂鉢

出土した瀬戸・美濃産の陶器類

● 戦国時代のかわらけ（土師器皿）

愛知県埋蔵文化財センター　鈴木 正貴

愛知県下の土師器皿は古代末期から登場します。古代（11 世紀頃）まで食器は灰釉陶器が中心で、土師器皿はわずかしかなく、底部に回転糸切り痕を残すロクロ調整の製品ばかりでした。

中世（12 世紀後葉頃）になると、底部に回転糸切り痕を残さない手づくね調整土師器皿が出現するようになりますが、その割合が地域で異なります。尾張では手づくね調整が主体、西三河ではロクロ調整が主体、東三河では両者が半々くらいでした。これが 15 世紀中頃には、なぜか東三河では手づくね調整が主体、西三河ではロクロ調整が主体、尾張では両者が半々に変わります。

一方、土師器皿は出土量が場所により偏る傾向が確認されています。中世前半から拠点的な遺跡や屋敷で多く出土し、戦国時代では拠点的な城跡や居館で大量出土する事例が散見されます。一般に土師器皿（特に手づくね調整）は京都の影響を受けたものと考えられており、この地方では主従関係などを確認するための儀礼に用いられた可能性が指摘されています。

ひがしばたじょうあと
東端城跡

愛知県安城市東端町中鶏子

調査面積	調査期間
800 ㎡	2001 年 10 月～11 月

愛知県埋蔵文化財センター　宮腰健司

東端城跡は安城市東端町にある戦国時代の城館です。発掘調査は緊急地方整備事業自転車歩行者道路設置工事に伴う事前調査で、2001（平成 13）年に実施しました。安城市と碧南市との境には油ヶ淵がありますが、その北西にある碧海台地の南西端、標高 7～8m の台地の上に東端城跡は立地します。東端城は 1580（天正 8）年、大浜羽城（碧南市）の長田重元が息子の尚勝に築かせたとされています。その後、長久手の戦い（1584（天正 12）年）で活躍した弟の永井伝八郎直勝に与えられ、1616（元和 2）年に幕府の命令で常陸国笠間城に領地を替えられるまで営まれていたとされます。発掘調査では遺構に伴う遺物が出土しなかったため城の構築時期はわからないものの、調査区の東と西にはそれぞれ土塁が検出されました。さらに西の土塁の外側（西方）には幅約 4.3m、深さ約 1.4m の堀が確認されています。


◀ 遺跡の遠景
矢印が調査区。
北から臨む。南には油ヶ淵がひろがります。

調査区全体図

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 113 集「東端城跡　御船城跡　矢並下本城跡」（2002）

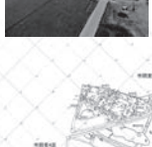
みふねじょうあと
御船城跡

愛知県豊田市御船町字島田

調査面積	調査期間
3,570 ㎡	2001 年 4 月～8 月

愛知県埋蔵文化財センター　武部真木

御船城跡は豊田市御船町にある戦国時代の城館です。発掘調査は東海環状自動車道建設に伴う事前調査で、2001（平成 13）年に実施しました。また 2011（平成 23）年には市道拡幅工事に伴い、豊田市教育委員会により隣接地点の調査も行われました。調査地は、豊田市水源町にある矢作川の峡谷よりも上流の豊田盆地にあり、盆地の中を北西から東へ流れる御船川の右岸、標高約 75m に立地しています。御船城は、現在の豊田市北部地域一帯を領有していた国衆あるいは国人領主といわれる地付の武士であった三宅氏一族の館と考えられ、応仁の乱ののち 1470 年以降に城館がおかれ、永禄 7 年（1564）に焼失するまで存続していたとされています。発掘調査で検出された遺構として L 字形に曲がる幅 3.5～3.7m、深さ 40～60cm の溝が確認されました。また、土師質の鍋釜類や、戦国期から近世の陶磁器類が出土しています。L 字の溝は、城館があったとされる旧地割の方向とほぼ一致します。この溝が屋敷地に関わる区画溝の一部であったと思われます。


◀ 遺跡の遠景
矢印が区画溝（SD04）が確認された調査区（01C 区）。
現在は東海環状自動車道が通ります。


御船城跡　屋敷地区画溝付近
（井上 2013 図に加筆）

井上康之（編）2013.『環境報告』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 14 集

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 113 集「東端城跡　御船城跡　矢並下本城跡」（2002）

▲歴史講座資料集より

V. 埋蔵文化財センターの活動

資料の貸出・提供

貸出先	目的	遺跡名	貸出・提出資料		対応日
株式会社誠文堂新光社	『知られざるやよいライフ』（印刷物・電子書籍）に掲載するため。	朝日遺跡	第154 集　朝日遺跡（総集編）赤黒斑文付パレス壺（(dtp154059.jpg）	1 点	2019/4/26
株式会社山川出版社	『大学入学共通テスト対応　日本史トレーニング問題集』に利用するため。		研究紀要５「尾張国富田荘の考古学研究」　64p 掲載　富田荘図図	1 点	2019/6/4
日本放送協会	NHK 総合「ネーミングバラエティー日本人のおなまえっ！」内で利用するため。	清洲城下町遺跡	第99 集　清洲城下町遺跡8　図版16　遺物3095・3096（099-183.jpg）	1 点	2019/6/20
西尾市岩瀬文庫	特別展「『新編西尾市史　資料編１　考古』刊行記念　考古遺物の美と謎（ミステリー）」に利用するため。	西川原古墳	第106 集　西川原古墳　石室全景写真（106-006.jpg）	1 点	2019/6/25
西尾市教育委員会	『新編西尾市史　資料編１　考古』刊行記念パネル展示「写真から見た西尾の発掘のあゆみ」で利用するため。	岡島遺跡 室遺跡 木戸城・古新田遺跡	第14 集　岡島遺跡　目次背景写真（014-S001.jpg） 第49 集　室遺跡　[第４章扉] 作業風景 P127（muro01.jpg） 第111 集　木戸城跡・古新田遺跡　第３図作業風景（111b-s011.jpg）	3 点	2019/7/4
一般財団法人こまき市民文化財団	小牧山城史跡情報館企画展「信長のお城絵」展で利用するため。	清洲城下町遺跡 名古屋城三の丸遺跡	研第53 集　清洲城下町遺跡4　航空撮影遠景　北より　(053-S026.jpg) 第99 集　清洲城下町遺跡8 遺物2469 (099-182.jpg) 第99集　清洲城下町遺跡 8 290p 石番12 （ RJ2.jpg） 第127 集　名古屋城三の丸遺跡7 調査区遠景(127-001.jpg) 愛知県埋蔵文化財センター研究紀要　第13 号『 後期清須城本丸考』（鈴木正貴）p57 図23　後期清須城本丸周辺の想定復元図	5 点	2019/7/26
一宮市博物館	一宮市博物館夏休み期間催事「博物館で夏祭り！」で利用するため。		壺釣り道具	1 式	2019/8/6
公益財団法人　瀬戸市文化振興財団	企画展「陶器生産の変革- 江戸中期の瀬戸窯と美濃窯」で利用するため。	名古屋城三の丸遺跡	第37 集 名古屋城三の丸遺跡3 巻頭カラー写真　(037-S04.jpg) 図版9 近世の遺構(4) 調査区全景(037-014.jpg) 第161 集名古屋城三の丸遺跡8 写真図版　遺構１ 調査区全景（161-002.jpg）	3 点	2019/8/13
鈴鹿市教育長	特別展「塩を作り、運ぶ〜伊勢湾をめぐって〜」にて利用するため。	松崎遺跡	松崎遺跡　土層剥ぎ取り 第20 集　松崎遺跡 [巻頭カラー下] 製塩土器堆積状況　断面（020 – 015.jpg） 第182 集　松崎遺跡２　上浜田遺跡 [巻頭図版４] 出土製塩土器各種(182-013.jpg) [写真図版５] 08Ab 区 O 層 製塩土器出土状況(182-074.jpg)	4 点	2019/8/13
株式会社NHK 文化センター豊橋教室	教養講座「三河の遺跡（仮）」のPR に利用するため。	石座神社遺跡	書第189 集　石座神社遺跡 第3 分冊[写真図版5　下] 09B 区全景（189-030.jpg）	1 点	2019/8/16
株式会社ジャパン通信情報センター	「文化財発掘出土情報」2019 年11 月〜 2019 年12 月号（予定）「各地の動向」に掲載するため。	滝瀬遺跡	愛知県埋蔵文化財センター滝瀬遺跡現地説明会資料（PDF）	1 点	2019/9/9
株式会社名古屋東通企画	テレビ愛知「サンデージャーナル」内において、愛知の遺跡を特集するにあたり、一色青海遺跡の発掘現場を紹介するため。出土品や過去の写真を資料として使用するため。	一色青海遺跡	第186 集　一色青海遺跡 III より 遺物写真図版１　200SD（186-371.jpg） 遺構写真図版4　A 区下面　北西から(186-018.jpg) 遺構写真図版20　201SI モデル入り 遺構写真図版31　B 区下面全景（186-155.jpg） 遺物写真図版17　E379（186-493.jpg,186-494.jpg,186-496.jpg） 第147 集　一色青海遺跡 II より [カラー写真図版1]　大型掘立柱建物SB017（147-001.jpg） 大型建物復元CG（147_tatemono.pdf） 一色青海遺跡　19 調査区 中世墓坑　半裁写真　2 カット	11 点	2019/10/1
ヒストリアへいわ	連続歴史講座「川ものがたり」（全９回）の実費提供資料「青木川の地政学　資料集　前編」に掲載するため。	清洲城下町遺跡 下津宿遺跡	「戦国のあいち展」（平成24 年度埋蔵文化財展）リーフレットより 地形図（２p）,年表（３p）,土師器皿写真（４p） 第175 集　下津宿遺跡より 表1-3　下津の歴史年表（７p） [遺構写真図版16　D 区最上面」(175-069.jpg) [遺構写真図版 18　D 区最上面・土面]（ 175 073.jpg） 下津宿遺跡 11D 区遠景写真,鍛造剥片写真,漆付き山茶碗写真 第53 集　清洲城下町遺跡より [写真図版13 一段目左] SE6002 (053-026.jpg) 清洲城下町遺跡　土師皿集合写真	11 点	2019/10/1
株式会社名古屋東通企画	テレビ愛知「サンデージャーナル」内において、愛知の遺跡を特集するにあたり、朝日遺跡と現在建設中のミュージアムを紹介するため。出土品や過去の写真を資料として 使用するため。	朝日遺跡	防御施設遺構（030-014.jpg)、防御施設復元図（朝日遺跡への招待-1995 年発行）、乱杭（030-013.jpg)、逆茂木（030-012.jpg)、航空写真（A-148.jpg)、貝層写真（083-070.jpg）	6 点	2019/10/3
豊田市郷土資料館	特別展「猿投山　ー祈る山、観る山、登る山ー」に利用するため。	上ノ段遺跡	第104 集　寄元古墳群・上ノ段遺跡より [カラー図版2 下・写真図版29 上] 上ノ段遺跡/ 遺構 遺跡全景(南から)(104c-003.jpg)	1 点	2019/10/24
株式会社敬文舎	設楽博己著「弥生時代」に利用するため。	朝日遺跡	第37 集 名古屋城三の丸遺跡3 巻頭カラー写真　(037-S04.jpg) 図版9 近世の遺構(4) 調査区全景(037-014.jpg) 第161 集名古屋城三の丸遺跡8 写真図版　遺構１ 調査区全景（161-002.jpg）	3 点	201910/28
西尾市教育委員会	企画展「古墳時代の西尾」に利用するため。	下山古墳	第6 集　下山古墳　図版4 下　横穴式石室(006-014.jpg)	1 点	2019/10/29
愛知県総務局長	「愛知県史　通史編10　年表・索引」に利用するため。	志賀公園遺跡 大毛沖遺跡 水入遺跡 清洲城下町遺跡 東光寺遺跡	断夫山古墳　航空写真 一色青海遺跡 焼失住居　(147-026.jpg、6-2.jpg ） 志賀公園遺跡　深掘り（6-3.jpg） 大毛沖遺跡 足跡 (6-4.jpg、6-5.jpg、6-6.jpg) 水入遺跡 調査区壁 (6-9.jpg) 清洲城下町遺跡 調査区遠景(027-S033.jpg) 東光寺遺跡 調査区壁(6-30.jpg)	10 点	2019/12/20
有限会社秋耕社	「東海の名城を歩く- 愛知・岐阜編-」に利用するため。	名古屋城三の丸遺跡 下津宿遺跡 清洲城下町遺跡	名古屋城三の丸遺跡　堀の写真（044-007.jpg、060-020.jpg） 下津宿遺跡　宝篋印塔の写真（175-002.jpg） 清洲城下町遺跡　土師器の写真（017-023.jpg） 石垣の写真（099-004.jpg）	5 点	2019/12/23

<<2020.1.7現在>>
70　点

ホームページ

公開ファイル

報告書および説明会資料、連続歴史講座などの資料PDFを追加。過去に刊行された年報について、一部PDF化を実施し公開。また、奈良文化財研究所が管理する「全国遺跡報告総覧」へも報告書PDFを登録した。

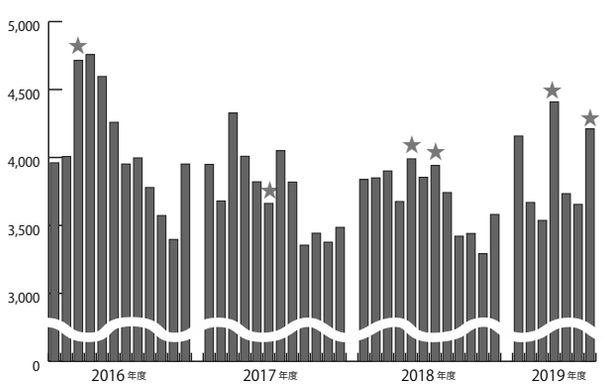
報告書PDF	262件
説明会資料	80件
年報PDF	433件
研究紀要PDF	194件
設楽通信など広報誌	138件
その他チラシ類	63件
歴史講座などの資料	28件
遺跡位置登録	260件
遺跡アルバム	42,138点
図書室公開データ	19,613点

ホームページのアクセス数について

トップページなどのアクセス数を図１と２に示す。トップページのアクセス数は、イベントの告知を行うと増加するが、全体としては減少傾向にある。「遺跡アルバム」は、報告書に掲載された写真をデータベース化して公開しているコンテンツである。このコンテンツのアクセス数は、2018 年度末以降、急激に増加している。これは、いろいろな場でコンテンツを紹介する機会が得られたこと、一部の遺物に関して実測図を表示できるようになったことが増加の要因と思われる。「子供用コンテンツ」については、2017 年度までは季節によるヒットの増大が見られたが、昨年からその現象は見られなくなった。これは、コンテンツのトップページに、再生が困難になったフラッシュコンテンツが貼り付けたままになっているためと考える。コンテンツの再構築が必要である。次に報告書PDFのアクセス数を見る。図２の報告書PDFのアクセス数を見ると、昨年度以来減少し続けている。一方、折れ線グラフで示した奈良文化財研究所の「全国遺跡報告総覧」における当センター刊行報告書のダウンロード数は、概ね増加している。また報告書付属データをダウンロードできるコンテンツでは、「全国遺跡報告総覧」に合わせた増減が見られた。

SNSの活用は、組織の知名度を上げることを目的に、従来どおり全職員での輪番による記事の公開を行なった。2020年1月上旬現在のフォロワー数はフェイスブックが927名（昨年度824名）、ツイッターが1,698名（昨年度1,224名）。また今年度より始めたインスタグラムについては、フォロワーが32名であった。図３に7月から10月のフェイスブックとツイッターでの反応の変化を示した。インスタグラムはフォロワーが少ないことから、集計していない。２つのSNSにおいて、人気のある記事はほぼ共通しているが、時々反応が異なる記事が存在した。それぞれフォロワーの趣向が現れているのだろうか。今後は、記事のアピール度をますよう、ハッシュタグをつけるなど、さらなるフォロワーの確保に努めてゆきたい。

トップページのアクセス数の変化　*http://www.maibun.com/top/*



＊概ね６月に新しいPDFを追加
＊イベントに関連して報告書PDFのダウンロードが伸びる傾向がある。
2016年度－６月「弥生への旅　朝日遺跡」愛知陶磁美術館　告知
2017年度－９月　常設展をリニューアル
2018年度－８月「板に込めた想い」清須市立図書館　告知
2018年度−10月　考古学セミナー「気候変動と弥生社会」
2019年度－７月「肝だめし」「歴史講座」ほか　告知
2019年度−10月「尾張の城と城下町」名古屋市博物館　告知

図1 トップページのアクセス変化

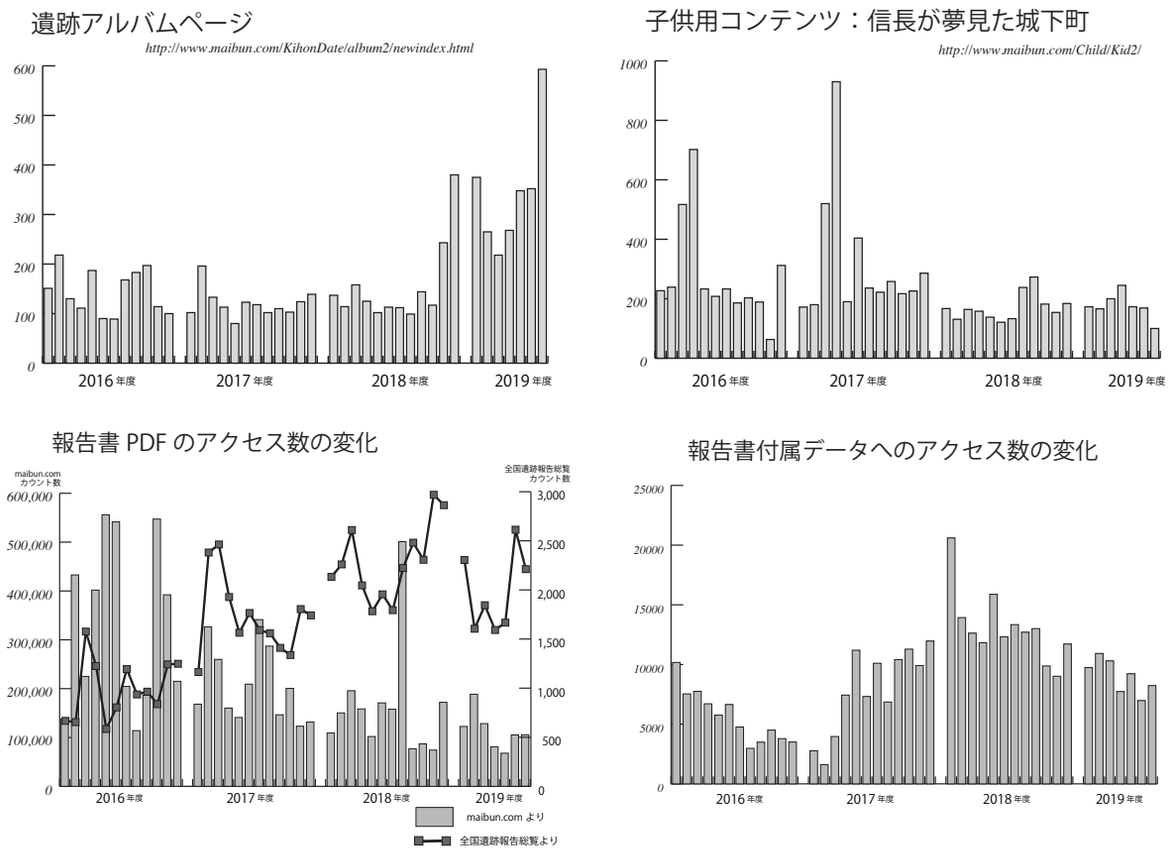


図2 主なコンテンツのアクセス変化

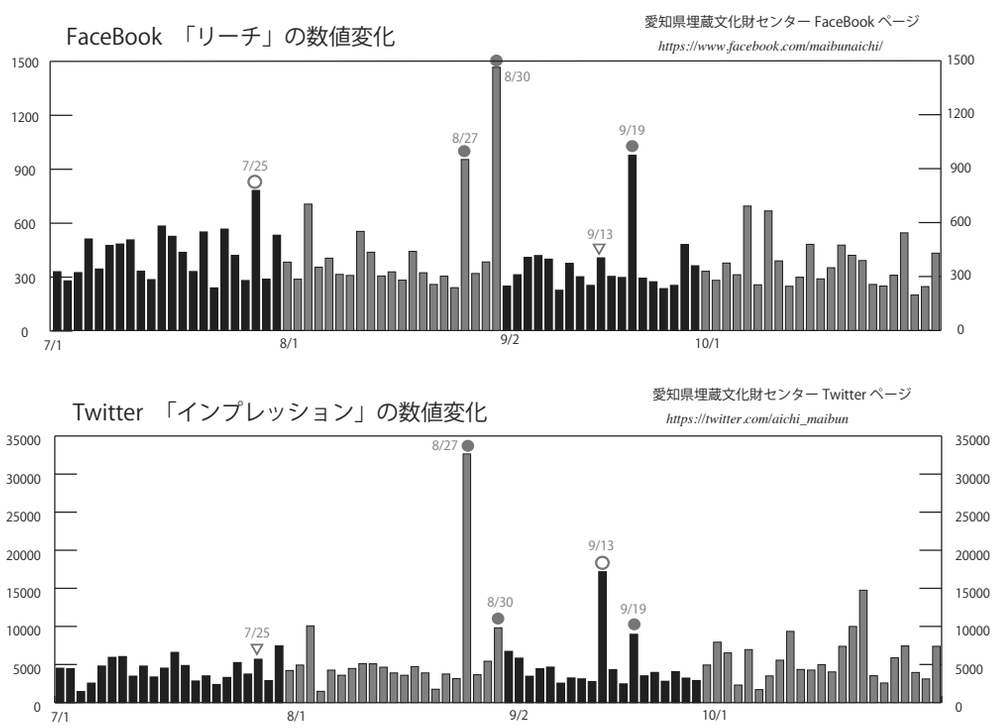


図3 FaceBookとTwitterのリアクションの変化

地元説明会・遺跡報告会

遺跡名	所在地	開催日	参加人数	
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	設楽町川向	令和元年８月10日（土）	27名	地元説明会
一色青海遺跡	稲沢市平和町	令和元年10月 5日（土）	48名	地元説明会
石原遺跡	設楽町川向	令和元年10月26日（土）	41名	地元説明会
一色城跡	稲沢市西本町	令和元年11月 2日（土）	100名	地元説明会
万瀬遺跡	設楽町川向	令和元年11月 9日（土）	35名	地元説明会
万瀬遺跡	設楽町川向	（感染症防止対策のため開催中止）		成果報告会
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 石原遺跡				

報告書作成のための指導

遺跡名	指導日	指導者	所　属
清洲城下町遺跡	令和元年10月17・18日（木・金）		
	令和２年２月20・21日（木・金）	杳名貴彦	国立科学博物館理工学研究部 研究主幹
	令和２年１月14日（火）	石田泰弘	愛西市教育委員会・佐織公民館
	令和２年１月31日（金）	藤澤良祐	愛知学院大学教授
笹平遺跡	令和２年３月17日（火）	増子康眞	名古屋考古学会

発掘調査における遺構・遺物などの指導

遺跡名	指導日	指導者	所　属
石原遺跡	令和元年 10月 19日（土）	前田清彦	豊川市教育委員会教育部次長
一色城跡	令和元年 12月 5日（木）	北條献示	元 稲沢市生涯学習課職員
万瀬遺跡	令和元年 12月 20日（金）	矢野健一	立命館大学教授
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	令和２年 3月　7日（土）	綿田弘実	長野県埋蔵文化財センター課長補佐

新城設楽地区新規採用教職員初任者研修

遺跡名	研修日	参加人数
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	令和元年８月２日（金）	参加者　14名／研修担当者　４名



その他普及事業

「レッツ！発掘体験と温泉」

主催：(公財) 愛知県教育・スポーツ振興財団
共催：(株) 旭高原、(有) ささゆり、中日新聞社
主管：愛知県旭高原少年自然の家
　　愛知県埋蔵文化財センター
後援：愛知県教育委員会、豊田市教育委員会
日時：令和元年10月26日 (土) ～27日 (日) 1泊2日
対象：小学生以上とその家族
参加者：９家族31人
開催場所：石原遺跡19B区および休憩所内

事業全般は、愛知県旭高原少年自然の家が主管となって実施し、その中で行われた10月26日の発掘体験について、愛知県埋蔵文化財センターが進行を務めた。

発掘体験当日は参加者の皆さんを３グループに分け、調査現場での発掘体験と石原遺跡の遺構・遺物の紹介、拓本体験を交互に行った。




拓本体験

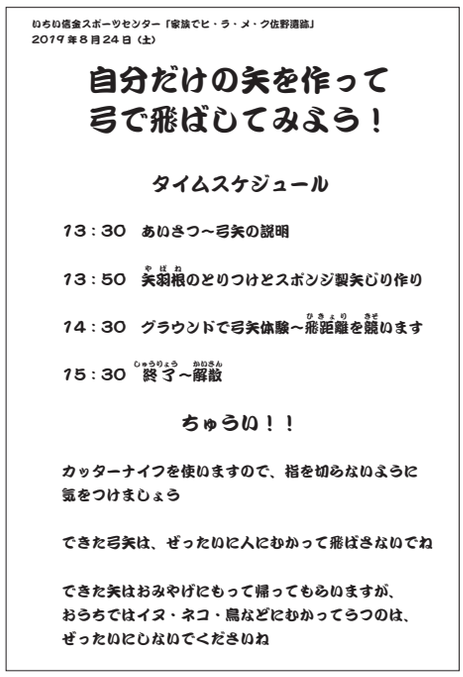

石原遺跡の紹介


発掘体験の様子


縄文土器・石器の取り上げ

家族の体験活動推進事業「家族でヒ・ラ・メ・ク佐野遺跡」

趣旨：一宮総合運動場内に所在する佐野遺跡（縄文時代）での縄文人の生活に想いを馳せつつ、縄紋人の生活体験を通じて家族でコミュニケーションを図る場を提供する。
主催：（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団
主管：愛知県一宮総合運動場
後援：愛知県教育委員会
協力：愛知県埋蔵文化財センター
日程：8月24日（土）
会場：愛知県一宮総合運動場 会議室
対象者・参加人数：小学生とその家族・10家族37人


いちい信金スポーツセンター「家族でヒ・ラ・メ・ク佐野遺跡」
2019年8月24日（土）

自分だけの矢を作って
弓で飛ばしてみよう！

タイムスケジュール

13：30　あいさつ～弓矢の説明

13：50　矢羽根のとりつけとスポンジ製矢じり作り

14：30　グラウンドで弓矢体験～飛距離を競います

15：30　終了～解散

ちゅうい！！

カッターナイフを使いますので、指を切らないように
気をつけましょう

できた弓矢は、ぜったいに人にむかって飛ばさないでね

できた矢はおみやげにもって帰ってもらいますが、
おうちではイヌ・ネコ・鳥などにむかってうつのは、
ぜったいにしないでくださいね

「弥生時代の矢を作って弓で飛ばしてみよう！」
概要：矢竹に矢羽根を取り付け、自分だけの矢を作る。さらに当センターで用意した丸木弓を使って実際に弓矢体験をして、何メートル飛ぶかを競って証明書を発行する。自分で作った矢はお土産として持って帰ってもらう。



用意するもの：
矢竹、矢羽根、紐、セメダイン、カッターナイフ、定規、カッターマット、マジックペン、硬質スポンジ、証明書

タイムスケジュール：
1．弥生時代の弓矢の解説（20分）
2．矢羽根の取り付け（40分）
3．グラウンドで弓矢体験（60分）


まずは矢の作成


作業の様子

令和元年度　愛知県埋蔵文化財センター　組織一覧

運営協議会委員

加藤安信	元学校法人大同学園顧問
川村雄司	愛知県教育委員会生涯学習監
高妻洋成	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長
城ケ谷和広	元愛知県立昭和高等学校長
杉山春記	愛知県都市教育長協議会会長 安城市教育長
竹内　誠	名古屋大学大学院環境学研究科教授
都築暢也	元中京大学客員教授

専門委員

考古学	伊藤秋男	南山大学名誉教授
地理学	海津正倫	奈良大学教授
	榎並正樹	名古屋大学名誉教授
保存科学	高妻洋成	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長
考古学	柴垣勇夫	元愛知淑徳大学教授
形質人類学	多賀谷　昭	長野県看護大学名誉教授
考古学	藤澤良祐	愛知学院大学文学部教授
建築史学	麓　和善	名古屋工業大学大学院教授
木材組織学	吉田正人	名古屋大学准教授
考古学 動物学 植物学	渡辺　誠	名古屋大学名誉教授

センター長

高橋寿人

管理課

課長補佐	川澄堅司
主　任	青山徳彦
主　事	村岡　香
主　事	村井聖美

調査課

副センター長兼 調査課長	池本正明
主任専門員	酒井俊彦　鈴木正貴 樋上　昇
調査研究専門員	堀木真美子　永井宏幸 鬼頭　剛　武部真木 蔭山誠一　川添和暁 永井邦仁　早野浩二
調査研究主任	鈴木恵介
調査研究主事	田中　良　河嶋優輝
調査研究嘱託員	宮腰健司

年報　令和元年度

令和2年3月
編集・発行　(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
印　刷　新日本法規出版株式会社